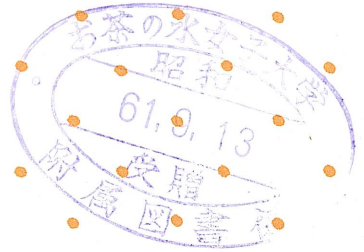


幼児の教育 10

1986

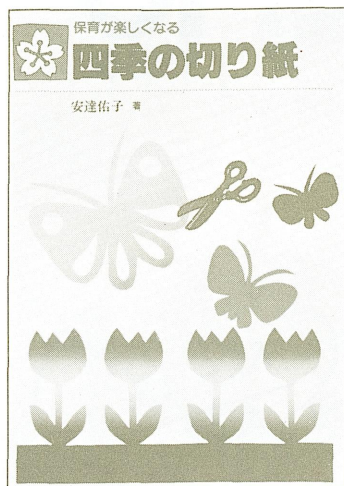
家庭・保育所・幼稚園



保育が楽しくなる

四季の切り紙

安達佑子・著 B5判・128頁・定価1,600円



絵で見てすぐに教えられる
切り紙指導の入門書

- 切り紙は、子供たちに指先を使って物を作ることを体験させ、さらに知的発達を促す効果も大きい、理想的な製作遊びです。また、その季節に題材した切り紙で保育室を飾って、いっそう明るい雰囲気盛り上げるのも楽しいものですね。
- 本書は、〈花火〉〈赤とんぼ〉〈雪〉〈ひなまつり〉などなど、四季折々のテーマごとに作り方のポイント／ヒント／作品の飾り方を解説した切り紙指導の入門書です。イラストを豊富に使った解説は、紙工作にまだあまり慣れていない方にもわかりやすく、また題材もかんたんにできるもので構成しました。
- 資料として、切り紙の歴史、切り紙の基本的な理論、子供たちに初歩から指導していく際の具体的な方法なども備え、切り紙研究・指導者として現在活躍中の著者の知識と経験が全編に込められております。

内容

四季を切る

- さくら
- チューリップ
- ちょうちょ
- こいのぼり
- しゃぼん玉
- あじさい
- 海
- 花火
- 赤とんぼ
- クリスマス
- 雪
- ひなまつり

折り方とその作品

各折り方の説明とその作品

資料編

切り紙の歴史と生活とのつながり
折った角度・面の数
多角形のつくり方
指導の実際

好評発売中!!

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十五卷

第十号

幼児の教育目次

——第八十五卷 第十号——

© 1986
日本幼稚園協会

「遊び」論議をめぐって……………本田 和子…(4)

SF的読み解き 子どもという風景

第十七回 まなざし学の素描……………堀内 守…(7)

子どもの遊び(その6)……………E・A・A・フェルメール、浜口順子訳…(17)

『子どもへの愛』の社会学(2)……………山田 昌弘…(22)



蔵前の保母養成所をたずねて……………土屋 とく…(29)

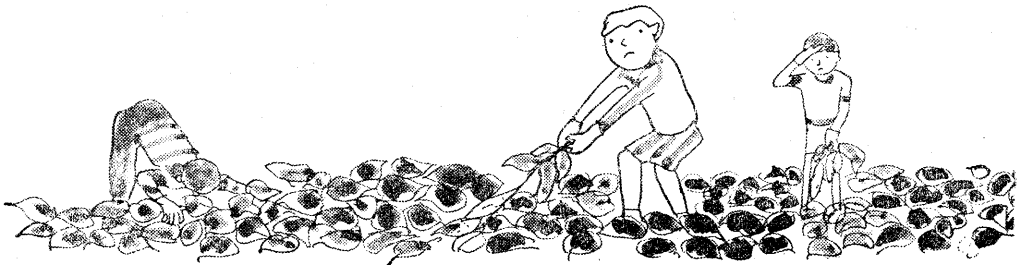
「ひみつのひみつの」……………牛山佐智恵…(40)

自然とのふれあい(その1)……………斉藤 芳子…(45)

うさぎぐみ音楽会を終えて……………青木 裕子…(50)

若いおかあさんたちへ……………はるにれの会 入江 礼子…(56)

カット・福田理恵



「遊び」論議をめぐる

本田 和子

「遊び」の重要性が改めて話題になり、保育内容の中心は「遊び」に置かるべきだなどと、ことごとしい論議が、いまさらのように展開されたりする。このこと自体は間違いはなく、また、決して悪いことではないが、しかし、いま、こうした論議が起こってくる背後を考えると、そこには、意外に大きな「何か」、そう、人間の変貌を予知するような「あるもの」が隠されているのではと思えて、いささかの戦きを禁じ得ない。

ことごとしく論じられねばならないほど、子どもたちは「遊び」から遠ざかっていくのだろうか。「子どもとは遊ぶものだ」という、私どもが自明としていたあのテーゼは、所詮、虚妄に過ぎなかったというのか。とすれば、このテーゼは、いつから私どもを呪縛

し、さながらにそれが子どもの本性であるかのように、私どもの眼を覆いかくしてしまっていたのだろうか。

「子ども」と「遊び」とが不可分に結び付いたのは、どうやら十七、八世紀以降のことらしいと、西欧の歴史は語っている。しかし、正確に言うなら、それは、大人たちが遊ぶことを止め、かなりの量の遊びを子どもたちに手渡してしまったということであろう。かつて、遊びは、大人と子どもの別なく、人間の生を彩る祝祭的な活動の様式であり、時の流れをいきいきと脈打たせる、重要な節目であった。遊びとは、曆の中に組み込まれた、人間の生のかたちだったのである。

わが国の場合も、おおよその動きは、同様に迎えることが出来そうである。たとえば、天正年間（一五七三―一五九二）に狩野永徳の筆になるとされている『洛中洛外図』（上杉本と呼ばれる）には、羽根つき・こま廻し・つな引き・闘鶏など、四季折々の遊びに、大人と子どもが隔てなく打ち興じ、戯れ合う情景が、いきいきと描き込まれていた。

しかし、元禄頃（一六八八―一七〇四）に、一つの節目がある。その典型例が「いんじ」と呼ばれる飛礮合戦の禁止。河原の石を拾って、両軍が盛大にそれを投げ合う石合戦は、時には死者も出るほどの危険な遊びながら、年に何回かの徹底した蕩尽とうじんの時として中世史を彩ってきた。死者の中に、年齢の低いものが混っていることから見て、恐らく、子どもたちも共に参加し、石を拾い、それを運び、時には非力ながらそれを投げさえしたのであ

ろう。先の『洛中洛外図』にも、この石合戦の場面が描き込まれていた。

元禄の通達は、くり返し、低年齢者の参加禁止を訴え、遂には、市中での飛礮合戦そのものを禁止するようになる。こうして、空間的な自由を奪われた石合戦は、やがて暦の外に追放され、人々の生きた生活の中から姿を消していった。しかも、それは、単に「いんじ」の遊びだけにとどまらず、大人たちの日常から「遊び」をしめ出し、それを「児童」として、幼いものたちの独占物へと変貌させる動きでもあった。江戸の中期以降、「児童」という呼称で遊びが記録され、遊ぶ子どもの姿がしばしば画材とされたのは、こうした時の推移の所産だったのである。

子どもが遊ぶのはよいことである。彼らがのびやかに、いきいきと遊ぶ姿は、私どもを楽しませてもくれる。しかし、それが、私ども大人が「遊び」を失なった結果であると考えるなら、彼らの遊びを見つめる眼は、より錯綜した光に彩られるだろう。

そして、いま、改めて「遊び」の重要性が叫ばれる。かつて、大人たちが手放した「遊び」を、いま、子どもたちまで手放そうとしているという危機感にかりたてられて……。
歴史は、また、一つの大きな変り目にさしかかっているのかも知れない。

(お茶の水女子大学)

第十七回 まなざし学の素描

堀内 守



まなざしとは？

「まなざし」とは、読んで字のごとく「眼差し」である。目で見ることである。

けれども、単に目にどう映じているかに限らない。動詞風に「まなざす」と言い換えてみれば、その広がりがあるの辺りであるか、およその見当がつく。およそ、だから、正確ではない。正確ではないが、かなりの広さであることがわかる。この辺かと思っても、その先はもっと

広がる。

「まなざす」とは、人と人をつなぐところの、いかに人も人間らしいやりとりを含む。

かりに、これをもっと限定して、「視線」としてみよう。それだけでもかなりの問題が浮かびあがってくる。

他人と目が合う。これだけでも、かなりの問題が浮上する。知らない人と、たまたま視線が合ってしまったときの居心地の悪さ。さりげなく視線を外す。パツの悪さはかなりのものである。

赤の他人とは視線を合わさない方が礼に適う——というの、ある文化の中でできあがっている約束事だ。相手の目をじっと見つめながら話すのがよいとする文化もある。逆に、それでは失礼だということになっている文化もある。

オトナの世界では「ガンをつけた」といって絡まれることもある。「ガン」は「眼」の音読みである。「まなざしをつけたな」といってすぐむわけにはいかない。「視線を合わせたな」といって絡むのでは様にならない。こ

このところはやっぱり「ガン」でなくちゃあ。さよう、

「ガン（眼）」は「ガン（銃）」を連想させるのである。すぐむことは、すぐむ態度は、必然的に圧縮された音、凝縮された音を爆発させる。

他人からぶしつけに見つめられたりするのを「じろじろ」と表現する。見つめられた側は厄介なかかわりの中に囚えられてしまう。逃げ出したくもなる。遠慮なくこちらをあばき立てるようで、居ても立ってもいられなくなってくる。こうなると、「なぜガンをつけるのだ」と怒鳴りたくもなろう。

むずかしい哲学談義に頼らなくとも、こんな例で「まなざし」の一端が知れる。

目をかける

他方、こんなことも見逃せない。それは、あの「ガン」とは反対の心根が存在するということである。それを仮りに「目をかける」と呼んでおこう。たとえていえば、「ガンをつける」ことが多くの場合受身で、「ガンを

つけられた」側に複雑な反応を引き起こすから、こちらの場合にはレーザー光線を当てられたようなものなのに、「目をかけてもらえる」方は、そんなにジリジリしはしない。こちらはホンワカ、ホンワカしている。

中国語ではレーザー光線を「激線」と訳している。さすが漢字の世界だと感心したりする。

おわかりのように、「じろじろ」はまさに「激線」よろしく、ただ一点に全エネルギーを集中して、どこまでも掘り進むのに似ている。これに対し、「目をかける」方の「目」は、一点集中ではない。それは、「ホンワカ」よろしく、慈眼であり、あたたかく包んでくれる。

慈眼の表現

「まなざし」のなかで、いちばん深々としているのがこの「慈眼」のようである。それに接すると、しぜんと微笑みたくなるような存在である。観音様の眼、マリヤ様の眼などのように、単なる眼だけでなく、全体が温顔で、慈愛そのものような像もある。

その場合、「まなざし」とは、いつも相互的な関係であることを心にとめておこう。つまり、「目をかける」とことと「目をかけられる」ことは同時に生じているのである。

なまの人間関係においては「慈眼」だけで成り立っているような関係はない。「慈眼」は、理想として求められるのだが、そのほかにもいろいろな様態がある。むしろ、このさまざまな様態のあり方の方が人間的なのかもしれないのである。

顔色を読む

まなざしは、きわめて多様な表情をもっている。「ちらっと見る」「じろじろ見る」「じっと見る」。漢語では「凝視」。

「大きな目で見る」「目をつむって聴く」「横を見る」「キョロキョロする」「上目づかいで見る」「下を見る」「にらむ」等々があなたの相手の行為だとしたら、それはある意味を発信してくる。だから、当然、それに対して、

こちらも応じざるをえない。これらを一括して「顔色を読む」という。なかなかうまい表現ではないか。

ついでだが、演技の初歩は、このあたりから訓練される。セリフだけが能ではない。「目は口ほどに物を言い」という格言があるが、それにはしかるべき理由があるのだ。

子どもが朝、幼稚園にやってくる。毎日のことだからもう慣れ切ってしまった。だが、そのしぐさ、動作、表情、ことばづかいなどを見ていると、ふしぎな感じがしてくる。まなざしとは、相互的なものである。そのとおりで、子どもたちのあいさつが、こちらを張り切りさせてくれたり、逆に彼らのあいさつのしかたの中に、ちょっとした不協和音が感じとられると、「あ、あの子はどこか工合が悪いのではなからうか」などと読みとることもある。この辺のレベルから発信される情報は、かなり敏感に感じとれる。

しぐさの数々

だれにも癖がある。「無くて七癖」という表現もあるくらいだ。いや、「癖」という字が少々おかしいのである。「」がついていることがおかしい。むしろ、もっと大らかに見て見る必要があるだろう。

「しぐさ」は、「仕草」とも、「仕様」とも書く。「草」は、何も「グラス」の「草」を意味するのではなく、「草々」なのである。要するに「草」も、「種」も、ともに「ヴァラエティ」のあることを示している。もともと「多様」であることを含んでいるわけである。

手の振り方一つとってみても、だれにも似ているところと、違っているところがある。似ているところだけを追っていくと、あまりにも似ているものだから、ふしぎに思えてくる。逆に、違いだけをさぐっていくと、何と違うものであることか、と驚くばかりということになりかねない。子どもとはそういうものである。

何かを指先でつまんで、じっと見つめている子——それを一枚の写真に写したとしよう。その行為は、写真のなかに固定されてしまった。写した時に眺める。また、

時をおいてあらためて眺め直してみる。それぞれの場において、受けとめられる意味は違いを見せるであろう。

同じ写真であるのに。

作品

子どもがつくった「作品」を手がかりにして「まなざし」を検討してみることができない。

この場合の「作品」も一様ではない。砂場で遊んでいたあとの「あとかたづけ」であっても一つの作品といえないこともないからである。

絵や粘土細工などはいかにも「作品」の中心的位置を占めているようだが、これとても、千差万別、十人十色、まことに大いなる違いが認められる。にもかかわらず、どこか共通する面ももっているのだ。

そこで、この違いと共通面について「まなざし」という面から考え直してみることしよう。

一枚の絵ができあがっていくプロセスは、子どもの場合は実に複雑である。対象の形、位置関係、その他基本

的なところが、子どもの世界観によって統合されているからである。

平面とか立体とか、線とか点とか——そういうレベルがいちじろしく柔かいのである。「花」を描く。その「花」は、花一般である。「花」というものは、ほぼこのようなものだ」という類型なのである。子どもは、そのような類型を頼りにして「花」を「描く」。

対象を何回も見つめ直し、描いては修正していくというような順序は省略されてしまっている。その代わりに、「花びら」も、「葉」も、「茎」も、類型的になり、たがいに描いていく作品を眺め合ったりしていったとしても、反省的な修正はなされない。

隣りの子の描いているのを見て、「あ、そうか、鉢も加えなくちゃ」と、自分の絵に欠けているものを相手の絵から学びとり、付加的に描くことはあっても、「あ、そうだ。花の色は一樣ではいけないのだ」というような、反省的修正はされないがふつうである。

もし、反省的な修正を強いられると、絵全体の balan

スが危うくなる。

「おや、この花の色は変だねえ。よく考えてごらん。花の色はこんなに赤ばかりじゃないでしょう。黄色いところもあるし、光の当たっているところ、陰になつているところでは色合いが違ふでしよ」などと指導したとしても、その意味はあまりにも抽象的にひびくし、自分の手の内を超えた操作を強いられていることになるのである。

「まなざし」的にいうと、この指示は、自分の作品をいちいち「あげつらわれた」ことに近くなるからである。

「じろじろ」と遠慮会釈もなくぞられたあげく、ケチをつけられたのと構造的には似てくるわけだ。

子どもの世界観は、彼らの操作可能な力によって限定されている。

たとえば、「線を引きましょう」といって、線を引く操作はできても、「直線を引きましょう」といって、「直線」を引かせることは困難である。定規を使えばできるじゃないかと思うのは、ある年齢以上の発想である。定

規を使えるようになるには定規を操作するまでの動作ができていなければならないだろう。

さらしもの

作品を「あ、よくできたねえ。みんなにも見てもらいましょう」と、展示するのは、作品を「衆目にさらす」ことである。羨望のまなざしに支えられることでもある。それはスターになったことに近いが、全体は共感的まなざしになっている。

ところが、同じ構造なのに、共感的まなざしが反対の非難のまなざしに転化している場合がある。これが「さらしものにされる」場合にほかならない。同じ「衆目」にさらされる場合でも、前者は共感的であるのに、後者はその反対になる。

これはごく大まかな分類なのかもしれない。

もっとよく見ると、子どもの世界では共感的なまなざし自身も一様ではないことが少なくない。一見共感的なまなざしのように見えながら、そうではない面も含みも

っている。

「いい作品だとほめられてよかったね」という声だけではないのである。かならずといっていいくらい、その声の一方には「ほめられていい気になっている」という非難、軽蔑、憐れみ、無視等の多様なまなざしが存在するのである。

特に、全員がつねにほめられるのが当然という状態に慣れていると、ほめことは自身がインフレ現象を起こしているから、「よくできた」と言われたとしても、単なるオセジに過ぎないことを子どもも敏感に感じとっている場合においては、事はもっと複雑になる。

目が届く

慣れ切ってしまうと、まなざしも複製コピーになってしまふ。つまり営業用のまなざしである。

営業用のまなざしの内部では人間関係は「売り手」と「買い手」の関係に押し込められてしまふ。そのことを前提とした上で、「売り手」は「買い手」にサービスを

売る。お愛想、お世辞、お相手、お世話、その他もろもろの関係が付加価値に仕立てあげられる。

よく見ると、そういう産業が成立し、肥大しつつある。セールのやり方などと銘をうった本なども分析してみると、「まなざし」のことごとくが商品になるような社会になったことがよくわかる。「買い手」の心をくすぐり、「買い手」を立て、というように、虚の業が系統的に論じられている。

こういう社会においては、「子ども」も「純真」ではなくなる。その結果、「子ども」が「客」に仕立てられて付加価値をつけ加えられ、他の子どもとは違ったところを見せるような風潮もあらわれる。かと思ふと、純粹思考が動転しかねないような現象もあらわれてくる。オトナがコドモに近づくのである。

コドモコドモしたオトナ。オトナびたコドモの情報幅をきかすようになる。

ある限定を超えると、「コドモコドモしたオトナ」があたりまえになり、「オトナびたコドモ」がふしぎでは

なくなってくる。まなざしに変質が生じるのである。

「困ったことですね」と嘆いていた声も消え、「これが時の流れなのだ」と受容するようになる。そして、その先には「時の流れに乗ろう」という動きも出てくる。

「お知らせ」

営業用のまなざしは、独自の動きをする。

それはCM（コマーシャル・メッセージ）に典型的にあらわれている。第一に、CMはしだいにロコツさを示さないようになった。以前のように商品名を連呼することとはなくなった。音楽、映像、文章を組み合わせて、みごとに優雅になった。「ではコマーシャルをどうぞ」という言い方も避けるようになった。同じことを表現するのに「では、〃お知らせ〃をどうぞ」と表現する。これもロコツさを避ける手法である。

第二に、CMは「どなたも使っておられます」を強調することから「あなたは違いが分かる人」という点を強調するようになった。

この原則は、意外と応用範囲が広い。新聞を一ページそっくり使っているから、新聞の記事のつもりで読んでいくと、しまいのところに「PRのページ」と小さく印刷されているので「ああ、何だ、これは宣伝だったか」とやっとわかる仕組みのものがある。これなども一例だ。

では、あるCMを子どもがマネしたとする。それが園中の子どもたちに流行したとする。それをどのていどの「影響」と見なすべきだろうか。

「困ったこと」だとあわてふためいて、「だれがハヤらせたのか、だれがそれを口しているか」などといって調べはじめると、いつのまにかその人のまなざしは「ウの目、タカノ目」に近くなり、ちょっとしたことまでウタガイの目で見ようになるかもしれない。そうなる時、そのまなざしに応ずるような疑わしきことは見えてくるが、他の面は視野から脱落してしまうかもしれない。同じ場面で別の見方をすれば、疑わしきことは消えてしまうかもしれない。

こんなのがまなざしにはつきものなのである。だから時折はまなざしのあり様を点検し直してみるのも大切なことである。

きっかけ

無理をせずともできることである。

子どもたちの生活場面のうちで、いくつかの境界がある。遊びと作業、園内と園外、覚醒と睡眠というような境目で何が生ずるかがキメ手である。ほんのちよつとしたきっかけによって、子どもたちは変身してしまう。すり抜けてしまう。入れ替わってしまうこともある。泣いていた子が次の瞬間笑っている。「忘れない」と誓った子が翌日には忘れている。「忘れない」と誓ったことを忘れ、何を誓ったのか思い出せない。それは子どもたちが「いま」において生きていることを示している。彼らのまなざしは「いま」に集中している。「いまのいま」に。

その「いま」は、時間的な面で理解することもできよ

う。また、これまで考えてきたように、さまざままなざしによってかろうじて支えられていて、次々と変転していくような構造のものとも考えられるのだ。だから、「ちよつとしたきっかけ」が物を言う。ありふれた、たあいもない、ほんの小さなきっかけ一つで、張り切ったり、落ち込んだりすることになる。

子どもという存在は、このような柔らかい存在であるように見えることもある。

しかし、反面、彼らが重い、どこでも動かぬような存在に見えることもある。あるきっかけで、軽快に動き出したのに、別のきっかけによってはニッチもサッチもいかなくなる。

こういうとき、「まなざし」という観点は、いろいろなことを教えてくれるように思う。

ひとつは、「まなざし」が相互的に成立するということであった。見る。見られる関係が同時的に成立する。

こちらが子どもを見ているのに応じ、子どももこちらを見ているわけである。

直接、ことばを通して子どもが訴えかけてくることもある。しかし、それ以上に、非言語的な面を通じて子どもが訴えかけてくる面も多い。黙っているから訴えることが何もないのか、というところではない。適切なことばをさがしあぐねているのかもしれないのである。逆に、よくおしゃべりするからごきげんがよいのかというと、さにあらずで、黙っていると不安になるので、たえず口を動かしているというようなことも起こっている。

余白や背景を含めて読みとることが必要になってくる。ありがたいことに、「まなざし」は相互的であるがゆえに、こちらがそういう態度をもって解読しようとしていけば、子どもの行動がより深いところ、より広いところで理解されるようになる。そういう可能性を開いてくれる。

「まなざし」は、配慮、気づかい、構え等にも通じている。これらは、前世紀の末より今世紀の後半にいたるまでの諸学において中心的な役割を占めた概念でもあった。子どもを固定した実体と見なすことよりも、かかわ

りのなかでどのような役柄を演ずるかに重点を置き、ドラマのなかでその特徴をとらえていこうというのがその第一の主張であった。

もうひとつ。これも忘れてはならないのだが台本をつくるだけでなく、自演してみなければならぬという主張も含む。テレクさを乗り超えて、大らかにきっかけを生かしてみることに、それも今日の「まなざし」学のみなざしである。

(名古屋大学)

(六) 遊びと発達

子どもの遊び (その6)

E・A・A・フェルメール

浜口順子訳

ここまで遊びについて論じてきた中で、子供の年齢の問題は、暗示する程度にとどめざるを得なかった。しかし年齢を重ねるごとに、子供の世界をとり結ぶ関係が多様化するの言うまでもなく、遊びの中で心的—身体的な自我を自由に制御することが次第にできるようになる。遊びの循環性運動や感覚受感的遊びなどの遊びの位相は、きわめて早く、乳幼児期からすでに出現している。そこで子供はもう、遊びとしての対話（子供と遊び対象とのダイアロギ的關係）が可能になっているのだが、知覚的世界からの諸印象が、情緒の受容能力の限界を越えて大きくなりすぎたり、別の言い方をすれば、子供の直観的世界がかきたてられすぎたりすると、そうした対話的状况は実現され得ない。

自我を制御することが遊びを可能にするが、この自我とは、身体的態度と世界をとり結ぶ関係との心的—身体的統一として理解されなければならない。遊びが発展し

ていくためには、自我を制御できる範囲が拡大していく必要がある。およそ四才ぐらいになると、つまりまだ幼稚園時代にあるわけだが、動作になめらかさが加わってきて^①、形態付与を通して、感覚受感的遊びよりも高次の段階に達することができるようになる。印象や表現を創造的に構成し、遊び対象であるモノや、ひいては自身をもよく把握できるようになるのである。それでも遊びの循環性運動や感覚受感的遊びなどの幼少期の遊び形式もなお見受けられ、新たな創造的態度はこうしたものとかわるがわる選択されていく。

遊びの循環性運動は、主として学童期に新しい推進力を獲得する。運動能力はより機能的に、より合目的に、より経済的になる。運動領域を拡張しようとする衝動によって、身体をより自由に制御しようとする傾向は妨害され、このため落ち着きを失ってしまう子供もいる。子供がまだ自分の活動性に対処する術をよく心得ていない場合は、殊にそうだ。この時期、モノの直観的性質や感触、親近性などに熱中する傾向は、以前ほどでは

なくなる。一方で活動半径が広がり、慣れ親しんだ環境の外側の領域へと踏み出し、さらに広範な世界を知るようになる。そこで子供は同年代の仲間達と出会い、彼等と共に新たな遊び世界を構築する。この際子供は、自分で使いこなすことができる技能を用いるが、これはまたその必要に迫られるからである。他の子供と一緒に遊べるためには、ボール遊びやなわとびや駆けっこができればならない。子供がもし他の子供との共同遊びに興じられないようであれば、これらの遊びの循環性運動はその強度を失うことになる。

しかし遊びの循環性運動からはまた別の位相の遊びも出現する。それは伝統やルールにのっとった遊びである。ルールを理解するには知的組織化を要するが、中でも、ルールに枠組された空間内においてもその新しい遊びの自由がちゃんと具体的に実現され得るのだということが、子供に了解されねばならない。同じことは、カルタ合わせやトランプなどの、知的組織化が前面に立つ遊びにもあてはまる^②。

競争への衝動がだんだんと強まり、子供社会に一定の位置を占めるようになる。ルールづけされた遊びの発展はたしかに阻害される。しかし自分の存在価値を確認しようとする行動と、遊びを進行させる自我の高められた活動性とが置き換えられてはならない。活動性は、より自由に自己制御できる自我を通して可能になる。自己制御できるようになることは、つまり自由を意味するのであり、これが勝負や蓋然性(チャンス)を競う遊びや、試合などへと子供を向かわせるのだ。

心的―身体的自我を制御できるようになっていくことは、遊びの循環性運動の遂行に必要であるが、これはまた感覚受感的遊びにもあてはまる。しかしこの自我は技能面よりもむしろ、感覚的反応性における自己保持の問題の方に関係している。幼児は諸印象に影響され易く、モノの触覚・感官的性質を喚起する印象にはすぐ引きずられてしまう。子供が自己保持できるかどうかは、他者との身体的寄り添いに依るところが大きい。運動機能が次第に発達し、幼児のよるべなさが失われていくプロセ

スの只中で、形態的表現を求める傾向が「騰貴」し、バランスを保とうとする。これが幼児期から学童期への移行をよりスムーズにする。学童期の子供は幼児ほど、形態付与によって情緒的充足を得られない。すでに見たように、学童期の子供にはモデルを模倣しようとする特徴があらわれ、モノの直観的な印象よりも、具体的な意味の方に興味の中心が傾くようになり、幼児期にはかなりの緊張をひきおこしてしまうようなものを志向し、熱中し始める。一方ではまだ遊びとしてのファンタジーを残しつつも、学童期の子供には、自分独自の形態付与をしようとする欲求とは無縁の模倣が起こるのである。情緒的反応性は低下し、遊びの形態付与への要求も減少するようだ。

情緒的反応性は、別の経路で出現してくる。技能面の発達が自我の遊びへの挑戦をひきおこしたように、身体的活動性の増大もまたこの挑戦を促す働きをする。青年期では特に、力強い遊び相手(対戦相手)を求める。つ

まり、保護された家庭的な状況からは遠ざかった世界を
求めるようになるのだ。この際、青年期の子供は遊びの
相手として自然的世界、殊にその自然的世界の脅威性、
神秘性などを追い求めていくことが多い。したがってこ
こでの遊びは、自己制御しようとする自我を通しての、
またその自我に対しての挑戦といえよう。自我は快・不
快体験を重ねながら、薄氷の上で自らを賭しているよう
なものだ。プロメテウスのごとく、^(※1)火だけでなく、その
火によって引き起こされる危険に伴なう不安とも共に遊
ぶのだ。青年期における性に関係した遊びにおいても、
新しく変化していく身体性と共に、そこに内在する快さ
と危機感とが同時に体験されるのである。なぜなら子供
は遊びにおいて、衝動に屈服してしまった自我とではな
く、自らを制御する自我と関わるからだ。自分を遊びに
向かわせる自由を見出した青年期にいたっても、勝敗の
可能性をめぐる遊びは続いていく。

発達の過程に現れる遊びの諸位相は、遊びが、いわば

自然から文化への橋渡しをするような発達経路の上にあ
るのではないことを示している。遊びはその両者の中間
に、独自の位置を保持している。遊びは自然的世界から
の抽出物ではないし、しかも文化という世界からも踏み
出している。自然、文化という双方の領域から重大な影
響を受けていることはこれまでにたびたび見てきた通り
だ。日常世界において大人は子供の遊びに対して開かれ
た空間を確保している。親の保護の下に子供は自分を衝
動の拘束から解放することができるのだ。人間の子供と
して子供は新しい形態的な表現を行なう自由を発見する
が、これは単なる自然の生活の中で（文化を介さずに）
遭遇される出来事ではないし、ましてや保育者の示すも
のを模倣して達せられることでもない。子供は大人と同
一化することを通して自分の姿勢を見出し、心的—身体
的自我としての自己自身を形成し、次第に自分の遊びを
確保できるようになるのだ。

読者もお気づきのように、本書の冒頭部分で遊びと現

実との関係について前もって粗描した際、イリュージョ
ンの(空想的・想像的)遊びの問題が、かるうじて触れ
られたままにとどま^(※2)っている。この点にもう少し深く立
ち入ってみることにする。子供にとってのイリュージョ
ンの遊びの意味へとさらにアプローチしてみたいのだ。

その枢軸はイリュージョンのな子供世界ばかりではな
く、人間ひとりひとりの世界にある。ここでは大人の世
界との関係にも言及されねばなるまい。大人たちは子供
に遊びの自由を与え、その創造性を鼓舞してきたのであ
る。しかし子供はまたここにおいても、イリュージョ
ンの世界を喚起するために、自ら貢献することを求められ
ているのだろうか。

(つづく)

《原註・参考文献(抄)》

①ポイテンディクは著書『人間の行動と運動の一般理
論』において、運動能力の発達段階について論じてい
る。(原註その1—⑤)

②(より高度に)知的に組織づけられた遊びにおいては、

直観性や身体性が強く作用している世界で期待や驚きが
もたらすような輝きが、もうすでにかなり失われてしま
っている。

《訳註》

(※1)ギリシャ神話中のタイタン族の英雄。天上の火
を盗んで人間に火を与えたため、ゼウスの怒りを買ひ、
コーカサス山の岩に縛られて、大鷲に肝臓を食われた
が、ヘラクレスに助けられた。

(※2)本訳その1参照。「幼児の教育」第八十五巻第
四号、四十三頁。

(お茶の水女子大学大学院)

『子どもへの愛』の社会学(2)

——子どもへの愛の成立——

山田昌弘

4、子どもへの愛の成立

フィリップ・アリエスの『子供の誕生』(1960年出版)は、近代家族、教育を論じる際に不可欠の著作である。この本は、従来の家族論、教育論の常識をくつがえしてしまった。彼は、絵画から小説に至る多様な資料を駆使し、西ヨーロッパ中世から近代に至る、家族や子供に対する民衆の感覚、見方、特に情緒的態度を明らかにした。「中世には子どもという概念が存在しなかった」

という大胆なテーゼのために批判も多いが、彼の理論はほぼ正しいという評価がなされている。(宮坂靖子「Ar-log Ph.の近代家族論の検討」家族研究年報11)まず、アリエスの成果を用い、近代ヨーロッパ社会における、「子どもへの愛情」の成立過程を簡単に述べてみよう。『子供の誕生』は、先ほど述べた有名なテーゼで始まる。もちろん、ヨーロッパ中世社会に「子供」がいなかったわけではない。我々の社会(すなわち近代社会)で

思い浮ぶ子どものイメージを、中世社会においては見出すことができないことを意味している。我々の社会での子どもに相当する年齢の人間は、二つに区別されて認識されていた。一つは、乳幼児であり、いつ死んでもおかしくない不安定な存在と認識されていた。少し大きくなり、我々の社会で少年・少女と呼ばれる年齢に達すると、大人と同様に扱われる。いわば、「小さな大人」と認識される。乳幼児期の子どもに対しては、かわいがりや戯れ的情緒規則が割り当てられていた。この感覚は、我々の社会で子どもをかわいがるものとは異質だ。「ちやうど動物と戯れるように、…人びとは子どもと戯れたのであった」。前近代社会の例に漏れず、乳幼児をかわいがるのは、親に限定されない（前号参照）。特に女性集団が、子どもたちをかわいがっていた。乳幼児死亡率が高い時代なので、「子どもは一種の匿名の状態からぬけ出すことはなかった」。

子どもが危険な時期をのりこえると、普通子どもは家族を出、「小さな大人」として扱われる。近代社会では、

家族を離れた大人同士の関係というと、冷たい、非情緒的な関係を思い浮べがちである。しかし、当時は、「感情の交流や社会的なコミュニケーションは家族の外にあって、隣人、友人、親方や奉公人、子どもと老人、女性や男性から構成されているきわめて濃密かつ厚い環境によって保証されていたのであり、そこで愛情関係をもつことにはたいした拘束もなかったのである」というような情緒関係が家族の外でもとり結ばれていた。この状況を専門用語で「ソシアビリテ（社交性）」と呼んでいる。つまり、子どもは10歳前後で、ソシアビリテの中に放り出され、家族外の人々と情緒関係を取り結んでいった。

家族の近代化を要約すれば、家族内に情緒経験が限定され家族外のソシアビリテが衰退する過程と言える。子どもに注目すれば、「子ども時代」という認識が生れ、親は自分の子どもだけに愛情を感じるという情緒規則が形成される過程である。このような認識、情緒規則が突然生じたわけではない。西ヨーロッパでは、中世社会が

ら二つの大きな変化を経て近代社会に至るモデルが妥当する。一つの変化は、16—17世紀から生じた変化であり、もう一つは18世紀から始まる変化である。この二つの変化にはさまれた時期を、社会史学では、「原近代（プロト近代）」と呼んでいる。

16—17世紀には、家族と学校という二つの場所でも子どもに対する態度の変化が生じ、「子ども時代」という概念が強く意識されるようになる。まず、家族内では、かわいがりの感覚が発生する。「幼児のしぐさや、かれらを可愛がる事で受ける喜びを認めることは、もはやためらわれる事ではない」。自分の子どもをかわいいと感じる情緒規則の発生がみてとれる。一方、子どもをみるもう一つの感覚が家族の外で生じる。子どもは無垢で弱い存在であり、子どもを保護し教育ししつづけるのは大人の義務という感覚である。最初はこのような感覚は、聖職者や法律家、モラリスト達に共有されていただけであるが、この人々が、子どもを社会生活から隔離する「学校化」を推進したのである。原近代期は、家族内外で

二つの感覚が普及していく過程である。感覚の内容は異なっているが、「子ども期」という概念が成立している所に、中世社会との決定的な断絶を意味する。階層的には、当時の上層階級であるブルジョワジーを中心に進行する。

我々が理解できる子どもに対する情緒規則は、18世紀ブルジョワジー社会に、初めて見出す事ができる。そこに、16、7世紀に出現した子どもに対する二つの感覚が結合した姿が見てとれる。家族外の教育界に出現した感覚が、家族の世界に浸透する。モラリスト達が多く啓蒙書、聖職者の発言などにより、親にとって子どもは単にかわいがりの対象としてだけでなく、教育（しつけ、知育など）の対象とであると意識が広まる。19世紀イギリスブルジョワ社会で起った、子どものしつけを乳母や召使から母親の手に取りもどそうとする運動も、子どもの教育者としての親という意識が生じてきた証拠である。また、ルソーの『エミール』に見られる

ように、教育者の中に親代りとしての愛情に基づく責任感が生じる。

5、近代における子どもの情緒パターン

19世紀ブルジョワ社会に成立した子どもをめぐる情緒的環境は、近代社会の典型として、他の階級、周辺地域へと広がっていった。ここで、近代社会における情緒パターンを、マーク・ポスターの『批判的家族理論 (CRITICAL THEORY OF THE FAMILY)』に従って整理してみよう。

第一の特徴は、(学校に入學までの)子どもの情緒経験が、小家族に限定されるという点である。産業化による職業領域と家族領域の分離が始まる。家族は、家事や子育て、情緒経験の場とされ、家族や近所の人が一緒に働いたり生活したりする事がなくなる。子どもの日常生活において情緒的に係わるのは、親と少数の兄弟のみとなる。この環境は、子どもの情緒生活において重要な結果を生む。子どもが愛情を感じる事ができる対象、及び、

子どもが権威を感じる対象は共に両親(特に家族生活の担い手である母親)しかいない。子どもにとって両親は、逃れる事のできない、絶対的な存在となる。前号で述べたように、前近代社会では、子どもに情緒的に係わる大人が大勢いた。親は絶対的な存在ではなかった。

第二の特徴は、親のしつけ方法の変化である。前近代社会におけるしつけは、単純明快に、体罰が中心になっていた。慣習を破るような行為には、物理的傷みが増えられる。一方、近代社会においては、「精神的な罰」がしつけの中心になる。子どもにとって親の「愛」は不可欠の存在である。親が子どもを無視するだけで、子どもは情緒経験の場を失ってしまう。道徳を破るような行為に対しては、親は「こんな事をするともう愛しませんよ」というように、「愛」を武器にして、子どもに精神的傷みを加える。当時のブルジョワ社会が性的抑圧を重んじる道徳を持っていた事を思い起してみよう。厳しいトイレット・トレーニングや性的悪戯(性器いじりなど)の禁止が、しつけとして行われた。

このような情緒環境は、子どもにとって精神的負担となる事は明らかだ。排便感覚や性器いじりには肉体的快感が伴う。子どもは、両親の愛情をつなぎとめるために、肉体的快感を断念する。これは、一種のダブル・バインド状況だ。子どもにとって両親は、自分を（愛情をもって）世話してくれる存在であると同時に、自然な欲求を抑圧する存在でもある。「愛しているから叱る」という行動の情緒的意味を理解する事は、非常に難しい。子どもは、まず、親との関係をめぐって複雑な情緒環境を生まなければならない。そして、前近代社会と違い、親から逃れる事はできない。

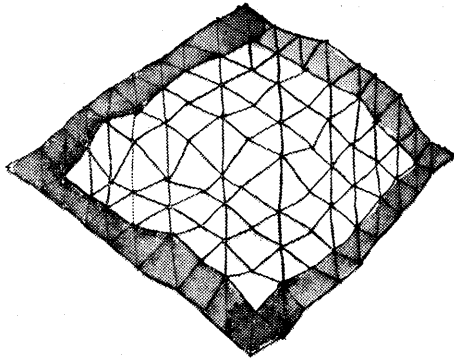
近代社会は、教育の中核として義務教育制度を発達させている。子どもは、一定の年齢になると学校に入学する。学校における教師・子ども関係は、近代家族にける親子関係のコピーといえる。教師は、少なくとも一定時間は、子どもにとって絶対的存在となる。教育される事は、多くの子どもにとって楽しい経験ではない。さらに、教育行動は教師の愛情から行われるという意味付与

がなされるため、子どもは教師に対してアンビバレントな情緒を抱く。

以上、見てきたとおり、近代社会における子どもは、両親という限定された関係の中で（愛情、権威両方含んだ）情緒を経験し、長じては、教師が加わる。子どもにとってつらい体験も、「愛情から出た行為」という意味付与が錦の御旗となり、耐える事を強いられる。つらさを親や教師に直接ぶつけるわけにはいかない。「愛情から出た」と意味付与されているからだ。だからといって、情緒的に他の人の所へ逃れる事もできない。子どもにとっての情緒経験の場は、家族しかないからだ。子どもは、つらさ、怒りなどのフラストレーションの感情を内面に抑圧する。「子どもへの愛情」が社会的に確立したために、かえって子どもの情緒的負担が増すという状況が見てとれる。

6、近代社会における「愛」の強制

近代社会における情緒的負担が重くなったのは、子ども



もだけではない。親・教師の側の情緒的緊張も増大する。前号で述べたとおり、愛情という情緒経験が生じるのは、内面で情緒規則が作用しているからである。近代社会では、親（教師）は自分の子どもに愛情を感じるといふ情緒規則が内面化されてきた。親は、自分の子どもをみると（内面化している情緒規則を意識することなく）愛情を感じる。正確に言えば、愛情を感じる場合もある。近代社会では同時に、親が子どもに対して行なう行動に対し、「愛情から出た行動」という意味付与を行なう。

以上のような「親は子どもをみて愛情を感じ、子どもに対する行動に愛情を込める」というメカニズムが、近代社会の理想とされてきた。しかし、現実には、親が子どもに感じる情緒経験と子どもに向かって行なう行動への意味付与は必ずしも一致しない。問題になるのは、愛情を感じないのにも拘わらず、子どもに対する行動を「愛情がこもっている」と意味付与するケースだ。世間一般は、親や教師は子どもに愛情を感じ、その行動には

愛情がこもっている事を当然と思っている。子どもを扱う当の親や教師にとっては、愛情を感じる事が社会的圧力となつてのしかかる。社会的圧力が心理的なものにとどまらず、現実のものになつたケースもある。20世紀初頭のアメリカでは、子どもを放っている親から「愛情がない」という理由で子どもを取り上げ施設に入れるという法的措置がとられた。以上の例は極端にしても、近代社会における親（教師）は、子どもに愛情を感じる事を心理的に強制される。しかし、四六時中愛情を感じているわけにいくまい。親にしる教師にしる、いやだから叱る、嫌いだからなぐる事は、普通誰だつてある。しかし、愛情を感じるのが当然という規範があるため、いやとか嫌いとかの本来の感情を抑圧し、愛情からでた行為という意味付与を行なう必要がある。この事は親、教師にとつて精神的負担となる。

このような親及び教師の情緒的態度は、子どもを情緒的に混乱させる。親の本当の感情と親の行動に付与した意味（言説）が分離する。子どもは、「愛していると言葉

では言っているけれども本当は怒っている」と感じる。

これは、ダブル・バインドに他ならない。前節で、子どもにとつて親は、愛情の対象であると同時に恐怖の対象であると述べた。それゆえ、近代社会においては、子どもは二重のダブル・バインド状況に置かれる。ペイトソンは、情緒障害の子を研究してダブル・バインドを発見した。しかし、近代社会においては、すべての子どもが多少なりともダブル・バインド状況に置かれている。

次回には、近代的情緒パターンが形成された原因と、家族危機と言われる現代社会における状況を考察する。

（東京学芸大学助手）

蔵前の保母養成所をたずねて

——初期の保育者養成——

土屋とく

四章 検証

浅草区教育会の古い記録の中から蔵前の養成所といわれていたのは、実は東京府教育会教員養成所が浅草家政女学校を教場としていたものであることが明らかになった。

この章では初期の保育事情を参照しながらその事実の裏付けを行っていききたいと思います。

未だいくつか残されていた疑問点もこうした操作をすすめる過程で自ずから解消されていくであろうから…。

一、幼稚園の設立と保育者の需要

衆知のように近代的な教育としての幼稚園の設立は、明治九年官立の東京女子師範学校（現在お茶の水女子大）附属幼稚園が始りとされているが、続いて同十一年に修業年限一年の保母養成所が同校に開設される。

しかし募集を開始したが入学を希望するものは少く、止むを得ず十三年には本校の生徒に幼児保育法を課して小学校教員と併せて保母の資格を与えることとし、この保母練習科は一旦廃止された。

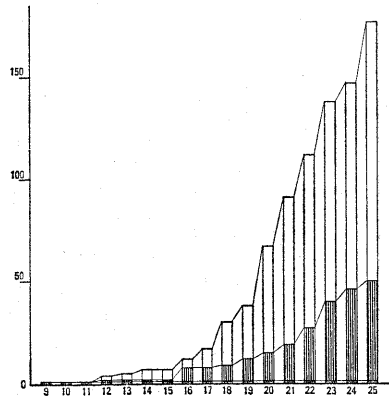
同校の卒業生は人材の乏しい各地の幼稚園に指導的役割を担って赴任したが、十年代の保育者養成は概ね見習い方式でその数も少なかった。

明治二十年に入るところから新しい教育に対する諸事情も漸く落着きをみせるようになり、幼稚園への認識も次第に浸透して公・私立の幼稚園の設立が急に増えてくる。それはいうまでもなく保育者を求める声の高まりでもあった。

その頃の全国幼稚園の増加の推移、又教員数の増加をグラフに表わすと図1、図2(次ページ)のようになる。

国立の幼稚園は明治末年迄一園のまま据置かれるが、東京では各区の公立の小学校に幼稚園が次々と附設されるなど公・私立の幼稚園の設立と保育者の増加が著しい。

「幼稚園」というものに対して一般の人々の理解がすすむ迄若干の時日を要したのは、いくつかの理由が考えら



第1図 全国幼稚園数の推移
(明治9年~25年)

(百年史教育統計より)

上段：公立 中段：私立 下段：国立

れる。

それまで我が国には幼児教育を独立の機関で行うといった考え方は無かった。

江戸時代の幼児教育に関して「心ある人々の子弟は家庭内に於て、或は寺子屋に於て、相当早い頃から教育を受けていた。寺子屋の主としたところは少年期から青年期にかけての教育で、その中から幼児期だけの独立した教育機関を取り出してみることが出来ないが、事実上は幼年期の者がかなり多数ここで教育された。またその教

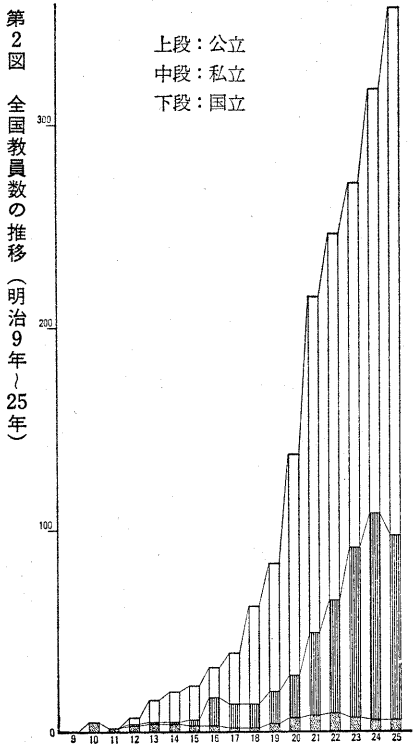
科目に織込まれているものの中には、幼稚園の創立期に主として用いたところの保育科目に似通っているものが少くない。例えば折紙、絵画、手工、談話があり、教え方も一斉教授をさけて一人々々に適した方法を取ったこと等を見れば、寺子屋という一般教育機関の一部に幼児期の教育機関が含まれていたということが出来る。”（東京市の教育 昭和十二年二十四頁）

更に寺子屋から近代的学校教育への転換に際し、
 “明治五年学制頒布の当時、東京府に於ては先ず東京市を六大区に分け各区に一校づつ六つの小学校を設立した。尚統いて各区の寺子屋を公立小学校に改め、各区長をして寺子屋の師匠に説かして其の儘公立小学校教師として生徒と共に公立小学校の方へ收容するというようなことが諸方に行われた”（帝都教育会六十年史 三十四頁）とある。

明治十七年文部省が特に「幼児は幼稚園の方法により保育すること」と通達を出している

ることは、近代的教育制度の普及定着までにいろいろな混乱や混同が、かなりあったことを物語るものとして興味深い。

当時としては欧米にならって新しく導入された幼稚園に対して、最初のうちは物珍しさといささかの抵抗が父兄の間にあつたであろうが、一旦その真意が理解されてくると今度は我も我もと希望者が増加して、定員上断るのに苦勞する事態まで起きたという。



二、教育会と短期の養成

以上のような状況を背景として、新教育の普及、改良、進歩を図るべく先覚的な人々の手によって結成されたのが教育会という組織である。学事に直接関係のある者、また教育に対して特に篤い志を持つ者とが相計って事態に処すべく官民一体の協力体制を作ったのである。

創立の当初は東京府教育談会と称し、二十一年に東京府教育会と改められたが、役員として名を連ねている人の身分は文部省や府の役人、小学校長、民間の有力者である学務委員、区会議員等である。活動内容は主に啓発のための有識者による講演会、現教員や補助教員講習会、機関誌の発行その他であったが、中でも会経営の教員養成所の開設は特筆すべきもので、同年芝区芝公園地内の芝麻布共立幼稚園に附属の保姆講習所が先ず設けられる。次いで小学校教員速成伝習所、家事専科伝習所、英語教員伝習所が開設され毎年多数の卒業生を送り出していった。

創設時の保姆講習所の設置願いや規則から伺える目的

は、「幼稚園保姆に必要な学科即開誘法諸遊戯及び唱歌等を修めんとする者の為に専速成を主として之を設く（授く）」とあるように、短期間で現実的要望に応えようとするものであった。

講習期間は六ヶ月

授業時間は毎日三時間以内通常学校授業時間外

講習員は左の二項の一に該当するもの

一 幼稚園保姆若しくは小学校教員及授業生の職にある者

一 年令十八年以上四十年以下身体健康品行端正にして相当の学力を有するもの（設置願いは尋常小学校卒業以上）

授業料は一ヶ月一人五十銭

学科課程は、開誘法六、遊戯法二、唱歌三、単音一
実地授業一

修了者には証明状が出され、有効期限は五年であった。

教員は二名とあり、東京女子師範学校附属幼稚園で保

育を五年経験し、講習所が置かれた芝麻布共立幼稚園々長であった近藤浜が指導のイニシヤチブをとったようである。

届出文書にある設立者木寺安教は京橋区の学務委員で教育会の幹事でもあった人である。

この講習所は現在の竹早教員養成所の祖であり近々創立百周年を迎えようとしている。長い歴史の中には幾度か規則を変え、内容の向上充実が行われているし、また途中で休所、再開、統合を経験しているが、都市紀要、東京の幼稚園には「幼稚園保姆の出身校は明治三十二年の記録文書では二十名近い者のうち、この時はじめて東京女子師範学校が後退し、東京府教育会附属保姆伝習所が進出していることが注目された」と記されている（三四頁）。

そして創設以来大正期を経て昭和二年三月迄の保姆科卒業生数一九三三名、七年では二八四〇名の人材を世に送り出している。この多数の卒業生は東京府下は勿論、各地方、朝鮮、満洲（現中国）方面にも分布就職したと

いう。

三 教場の移動

これ迄調べてきた資料には教場についての記述が少く、大正期に於ける移動は直接文京区小石川の竹早教員養成所で確認するのが最良の方法であると思われる。

幸い前出の蔵前幼稚園長の五月女氏が所長の小山昌一氏と親しい友人ということで、紹介の労をとって下さる事になった。

連絡の行き違いからここでまたしばらく時が流れてしまいが、五十九年七月漸く実現。昔の事を良く御存知の事務の方と共に小山所長のお話を伺うことが出来た。その際御好意で養成所の九十年史を頂戴する。

この記念誌には創立以来の詳細な記録が載っており、果してその六十五頁に明らかに「大正八年四月に浅草区蔵前の浅草家政女学校内に一時教場を移した」とあり、講師の大森乙五郎氏の「私の授業は毎週火木兩日午後四時から二時間宛でした。生徒の意気込はたいしたもの

で、一言半句も聞きおとすまいとして眼をみはり、耳は兎のように、到底想像出来ぬ程の熱心さでした」というその頃の学生の授業態度をつぶさに語っている文が、その頁に併せて読み取れたのである。

以下教場の移動を中心にすえて記録を引用してみる。

。創立時の保母講習所は前述した通り芝麻布共立幼稚園内。

。翌二十二年には東京市神田錦町和楽堂に移る。

因みに同年小学校教員速成伝習所が京橋区木挽町東京商工会議所で六月開所式、八月に教場を京橋区泰明小学校に、九月に宝田小学校に移る。二十四年仮りに神田区錦町私立錦美小学校に於て裁縫伝習所開き二十五年に家事専科教員伝習所と改称、二十八年麴町区飯田町稚松小学校に移転。

。保母講習所は一時休止していたが、三十四年保母伝習所として東京府第一高等女学校の校舎を借用して開かれる。家事科も同所に移り、小学校科は府立第四中学校に開設。

。四十年神田区錦町一つ橋幼稚園に一時閉鎖を経て再開。

。所長は東京府女子師範学校教諭堀田要三郎氏を依頼

。大正八年四月に浅草区蔵前の浅草女学校

。所長は平田華藏氏 十年十一年の所長は高橋清一氏

。十一年四月から教場を教育会の事務所と共に小石川区竹早町の東京府女子師範学校内に移す。

十二年より所長は女子師範校長、竜山義亮氏、——この年九月 関東大震災——

。大正十四年東京府と東京市が合併され、東京府教育会は社団法人帝都教育会と改称。会長は貴族院議員伯爵、松平頼寿氏就任、教員養成所は同会の附属として経営が移ると共に名称も変更される。

昭和二年に所長は竜山氏より師範学校長 田中一元氏になる。

養成所は竹早町に移ってからは、なかば公立扱いを受け、所長は女子師範学校長が代々兼任。講師陣も師範学校の教員が多かった。実際の運営は師範附属校の主宰ま

たは教諭が当り、経済面は独立採算制をとった。

明治・大正期に教場が度々移動するのは、教育会という組織の附属として運営されていた関係上仕方が無い事情があったと考えられる。なぜなら教育会は有志による営利をこえた教育的熱意によって支えられていたもので、会の運営や養成所の経営はその時々役員がそれぞれ責任を分担し合つて事の処理に當つていた。したがつて私立の幼稚園、区立小学校、府立や私立の女学校等役員の所属する教育機関によつて事務所や教場の移動が行われたとみるべきであろう。

半公半民の協力体制は、多くのプラス面をもつていて同時に現実には種々の難しい問題をも抱えていたのではなからうか。

帝都教育会は昭和十八年都制実施により、東京都教育会となり養成所も同会附属保姆伝習所と改称。(この年府立師範は国立になる)

敗戦後教育会は戦争協力団体として解散を命じられ、

全国組織としての帝国教育会や東京都教育会の下部組織に当る浅草区教育会など皆同じ運命を辿ることになつた。

だが伝統のある教員養成事業は、東京師範学校同窓会が経営を引継ぎ、更に学制改革によつて学芸大学同窓会へと継承された。

三十二年学校法人竹早教育養成所として新校舍落成、今日につながるのである。

これで殆ど検討も終つたと思われたが、小山所長より大正時代の同校の卒業生で現在評議員でもある後藤いく様を紹介される。

四 あのことろのこと——後藤様談——

いく様は大正八年三月に東京府教育会附属保姆伝習所を卒業されている。生年は明治三十年で現在八十九才である。お耳が多少御不自由であるため、お話は断片的な部分もあるが、若い頃の記憶の中からいくつか伺えたことを左に記す。

- ・出身校は神田の東洋家政女学校である。
- ・伝習所は神田錦町乾門いんげんのところの音楽堂で三百坪程の板の間があり、そこが教場であった。蔵前の事は知らない。

・講義は午後四時から二時間の講義、その後二時間の実技があり八時迄であった。

・予科と本科があり、半年・一年の両コースがあった。これは入学前の学歴による。

・校長は堀田要三郎氏 所長は高木四郎氏

・音楽担当は最初丸山先生 その後大和田愛羅先生（女子師範音楽担当）

・蔵谷小波先生は講師として話を聞いた事がある。

・卒業後は大阪に行き、大阪日々新聞の社会部長をしていた橋爪せみろう氏が宝塚に「家なき青空幼稚園」を作り、その先駆的活動に感動、協力した。

・大阪小浜村の住吉神社境内に絵馬堂があり、その柱のある一間で大正十二年にこども達四十人位を集め四月から九月初めまで保育した。その間父兄の木工さんが

ブラックを建てるなどしたが、関東大震災が起り、大迂回をして漸く東京に辿りついた。

・橋爪氏の友人であった後藤隆氏―夫君―は大阪広瀬のよしだやに児童文化協会を設立、赤い鳥運動と呼び立て児童運動を活発に行った。「こどもの家」 発刊 画家の岡本婦一氏が絵を描いていた。

・この頃は幼児教育の夜明けの時で、新しい音楽などは仙台や神戸のキリスト教関係から普及した。

・小学校の校長先生等と協力して遊戯会を開いたり、大阪船場小学校で幼・小協同してラッパの蓄音器で水曜日に二時間勉強会をした。

・その他、大和田愛羅先生や久留島武彦、北原白秋、野口雨情、水谷八重子など二時間程話して下さった。しかし御高齢でもあり、また何十年前の事柄について伺うのは難しい点が多かった。

以上のことから最後迄残されていた疑問に就ても、ほど解答が出されたといつて良いであろう。

A 入学条件について

原則として高等女学校ということであったが、これも予科本科によって修業年限の巾が設けられ、幼児教育に對して向学の志ある者には特例として門戸を開放していたと思われること。

B 通学期間

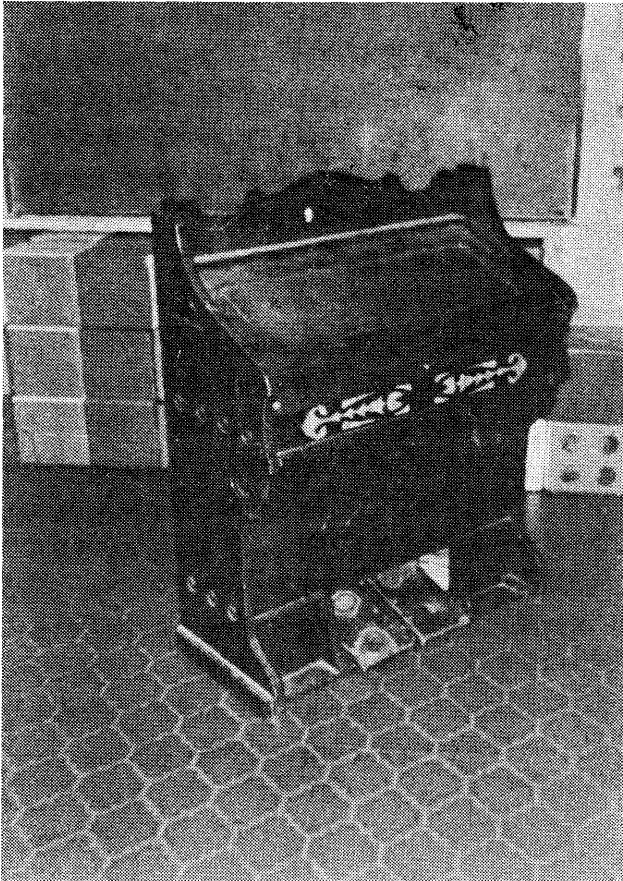
二ヶ年通ったというのは所定の在学期間にくらべ長期にわたっているが、明治後期の東京女子高等師範学校保育実習科の規則にも第五条に「修業年限は四ヶ月以上二ヶ年以内とす」とあるようにかなりの余裕を認めていたと予想される。昼間勤務した後の養成であるため当然このような措置が必要であったと思われるのである。

C 校長、講師については教育会主催の講演会、講習会、特別講義の機

会が豊富に用意され勉学には恵まれていたのである。

むすび

保育室に置かれた古いオルガンから、ある保母養成所



を尋ねる旅は始った。

長い旅であった。

「昔のこと」と一言で捨て去ってしまえばそれで済むことであつたかも知れない。しかし数十年前、多田タメノ様が十代半ばの若さで毎日遠い道を徒歩で通つた学校の事を懐かしく想い出され、その頃の事を追憶なさつたことに對して、何か応えなければならぬという氣持が強く私を支配した。

いくつかの糸をたどり、その先が途切れ、また氣を取り直して他の糸をたぐるといつた作業が続ぎ、何度か放棄しようとした。

だが途中で投げるより好奇心が持続したというべきか、かすかな手がかりから古い文書を見つけることでこの課題は解決に進んだ。

それは青天の霹靂のように一度にすべてが明るくなつたといつてよい瞬間だつた。

幻の養成所は幻ではなく確実に存在し、しかも幼稚園史の中で大きな足跡を残す教員養成所のまさに借りの姿

だつたのである。

迷い、導かれ、知り、多くの人との出会いがあつた。何も言わないオルガンは昔のすべてを知つていたのかも知れないが……。

(貞静保育専門学校)

参考文献

○幼稚園教育百年史

文部省

一九七九年

○お茶の水女子大学百年史

百年史刊行委員会

一九八三年

○東京市地籍地図帖

東京都公文書館蔵

○東京市学務兵事課 東京都公文書館蔵

○学事 市立学校 第一種の一七

○帝都教育会六十年史

東京都教育会

一九四四年

○東京教育資料大系第八、第九卷

。東京市の教育

東京都教育研究所

一九七四年

。教員養成九十年

竹早教員養成所のうつりかわり

竹早学園

一九七九年

東京市役所

一九三七年

。都市紀要一四 東京の幼稚園

東京都

一九六六年

。近代日本教育制度史料 第三五卷

大日本雄弁会 講談社

一九五九年

。近代文学研究叢書 第三五卷

昭和女子大学

一九七二年

。浅草区誌 下巻

区誌編集委員会

一九一四年

。浅草区誌

浅草区役所

一九三二年

。浅草蔵前史

蔵前史刊行会

一九五八年

。弓町本郷教会八十年史

弓町本郷教会

一九六六年

「ひみつのひみつの」

——つながりを求める心——

牛山佐智恵

子どもたちがごっこ遊びで交す言葉には、すぐにはその意図がわかりかねるような微妙な表現のものがあります。とりわけ、仲間とのつながり確かめたり、仲間でない者を退けたりするような言葉には、ぬきさしならぬ厳しさがあって、それだけに表現も巧みさを増します。それぞれの子がその言葉にこめたものをあれこれと思い返すとき、自分の身の置きどころを懸命に求めている子どもたちの願いがおぼろげながら見えてきて、はっとさせられることがあります。

ある日、年長組の女の子たちがおうちごっこをやっていました。メンバーは七人、Yちゃんをはさんで左右に並ぶように集うと、さっそく粘土で何やら作り始めました。

「ぎょうは、びだからね」とまずYちゃん。隣のMちゃんが、「びだもんね」と返しま

す。その隣りのSちゃんは、「びじゃないよね」と言ったかと思うと、「きょうは、た・ん・び」と言いかけて、「タンプリンだからね」と言い直します。またしばらくすると、Sちゃんは、「たんじょ」「たんじょ」と繰り返します。

メンバーの中で、粘土に手を出さないのはSちゃんひとりでした。その手には色紙がありました。これといったものを作る様子はありません。Yちゃんが言った「び」にあたる言葉を探して、それをしきりに口にするばかりです。その様子は、仲間うちだけに通じる言葉を使うこと自体に興奮しているといったふうでした。

私はふと、その前日のSちゃんを思い出しました。お昼どき、この子はたったひとりでお弁当を食べていました。その日の午前中も、Sちゃんは同じおうちごっこに加わっていたのですが、その加わり方は微妙なものでした。

この子は、みんながいそいそとおうちを作っている脇で、「おふる作れば」とか、「冷蔵庫がないよ」とか、誰に言うともなく声高に言いました。しかし声高ではあっても、その言葉はいつも受けとる相手もなく通り過ぎていきました。Sちゃん自身も、そうしてあれこれ提案はするものの、自分からは何を作ろうとするでもなく、ただうろろするばかりです。その声がひとときわ高く、しかも頻繁であっただけに、私にはこの子のさびしさが気にかかりました。

このときの様子に比べると、「び」を盛んに言い換えてはしゃぐSちゃんは楽しげでした。いっこうに手は動く気配もありませんでしたが、Sちゃんはこのおうちごっこで意外

な働きをしました。

この子たちのおうちは、部屋の一部にありました。他の隅では、別のグループがおうちを作っていました。時々そのグループから、ひとりふたりと様子をうかがいに来る子がいます。「び」をひそかに確認し合ったこのメンバーにとって、そうした訪問者は、いわば都合の悪い部外者でした。

その到来をいち早く見つけるのがSちゃんでした。「そこ線路だよ——Sちゃんはそう言って、近づく相手をかかわそうとします。なるほどそこには線路らしきものがあります。相手もそれを認めるが早い、さっと立ち去ります、しばらくすると、次の訪問者が——メンバーの誰かが、「あつ、そこお便所」と言います。続けてSちゃんが、「そこ、お便所」と叫びます。そこには便所らしきものは見当たりませんが、相手は飛びのくように去っていきます。その様は、これらの言葉にこめた意図を、両者が互いにすっかり了解し合っているような見事なものでした。

ところで、私はそんなSちゃんにまずはほっとしつつも、やはりどこかに空しいものを感じたまま、その様子をながめるほかありませんでした。気がかりなのは、ほかのメンバーが「び」の一言で確認し合った約束事を、なぜこの子がことさらに口にするのかということでした。

確かにそれは、仲間と秘密を共有していることのうれしさの表現として受けとれるものでした。しかし同時に、この子が相変わらず集団の周辺部において、自分がその一員である

ことを絶えず仲間に向かって確認せざるをえない姿のようにも思えました。部外者の追出し役を果たしたことに、集団の周辺部にあつて、その内側にあるうとする者の願いが見えるように思つたのです。実際、Sちゃんが「たんじょ」「たんじょ」と騒ぐのは、粘土に余念のない仲間たちが、思わず愉快な声をたてたようなときでした。

ところが、この日は、そんなSちゃんの声に一度だけ仲間からの応答がありました。それは、Sちゃんの隣りにいたEちゃんからのものでした。

Eちゃんは、Sちゃんの「たんじょ」に、「び」と続けました。「たんじょうび」——その応答は、Sちゃんの秘密を事もなげにあはくものでした。ですから私は、この応答がSちゃんにはちよつと迷惑なものだったろうと考えていました。

というのも、Eちゃんは、どちらかというと言葉に幼なさを残す子でした。時々やってくる部外者への対応も、「来ちゃいけない」ともろに言つてにらむというものでした。ですから、秘密として語ろうとするSちゃんの意図が、Eちゃんには通じなかつたところに、二人の応答が生まれたように思つていたのです。

ところが、このときの二人の様子を思い起こすうちに、Sちゃんが求めていたのは、あるいはEちゃんのような対応ではなかつたかと思うようになりました。

Eちゃんは、粘土を取り出す前しばらくは、Sちゃんにつきまとうように、その後を追つていました。目当ては、Sちゃんが持っていた木片でした。「これ、使つていい？」——率直な申し出で、やつとその木片をもらい受けると、EちゃんはSちゃんに寄り添うよう

に並んで座り、ほかのメンバーと同じように、粘土でパーティー用のごちそうを作り始めました。Sちゃんの「たんじょ」に「び」と返したのは、隣りのSちゃんに向かってニコッと笑いかけた直後のことでした。

一方、Sちゃんの方は、その後どこかへ出かけたかと思うと、また木片を持って帰ってきました。「Eちゃんにあげる……積木にすれば」——そう声をかけて、SちゃんはEちゃんにその木片を差し出しました。それからSちゃんはやつのことで粘土に手をつけ、「あ」とはこれだけ作るのだ」と言うのと、「ひみつのひみつの」と歌うようにはしゃいだのでした。

二人の応答のかけに、こうしたやりとりがあったことを、私は自分のふがいなさとともに思い起こしました。Sちゃんの思わせぶりの言葉に惑わされて、なすすべもなくながめていた私に、もっと大事なことがあることを教えてくれたのは、むしろ言葉のやりとりには巧みさを欠くEちゃんだったからです。

Eちゃんとのやりとりに見たSちゃんの様子は、それまでのこの子の動きに比べると、ずっとひそやかなものでした。誰に向けてというでもなく声高にしゃべること——それは誰かと確かにつながっているという実感に乏しい子が、その言葉を受けとってくれる誰かの出現をただただ待ち望んでいる姿なのかもしれません。実際、親しければ親しいほど、ちらと視線を交したり、ちょっと耳うちするだけで、互いに事足りるものです。私は今、「ひみつのひみつの」と歌うように言っではしゃいだSちゃんの声を、内実のある秘密を共有できる相手を求めての懸命の叫びとして思い起こしています。

(長野幼稚園)

自然とのふれあい (その1)

——夏やすみ——

齋藤芳子

数年前から、夏やすみをのびのびと自然の中で遊んで、家族ぐるみで自然への関心を育て、心とからだの成長を願って、左の様なおたよりを家庭に届けております。

飼育する小鳥、小動物の世話、草花や野菜の世話や観察、庭先の草取りのお手伝いをたのんで、蟻や小さな虫の発見など……。

親・子で自然とのふれあいを、心にゆとりを持って、大切な「気づき 学ぶ時」として遊んでやって下さい。

その時の対話や、様子などを書きとめて二学期の始業時にお持たせ下さい。

◆夏やすみのおねがい (園からおたより)

夏の短い東北です。出来るだけ夏の解放された生活の中で、空と海と太陽の季節を、たのしく自然にふれて、のびのびと過して下さい。

記録の仕方例

親「お庭の草取り、少しだけ手伝ってちょうだい」

子「あつ蟻がいた。草の根っこここに」

親「どれどれ、ほんとだ、遠足みたいに並んでいるね。」

どこまでいくんだらう？……」

それからの子どもの、興味や観察、対話、飼育ぶりや

疑問・感動の言葉などを書いて下さい。

夜空の星や天の川、月などを見ている子どもの言葉や
空想。

海・浜の水遊びや砂あそび、貝拾い、海藻や、カニ
の穴探しなどの発見など。

山・丘・林・森などの言葉の理解

松、杉、ポプラなど、大きな自然の樹形の理解、など

以上思いついた例ですが、自主的に気づいたこと、遊
んだことを、一行でも二行でも書きとめて下さい。

毎年この資料は、先生も親も、幼児の心の内面の成長
の発見と理解に役立ちます。

御一緒に勉強しましょう。

幼稚園より

◆「自然」の保育をめぐる

幼稚園教育要領「自然」には、教育の四つのねらいが
説明されています。

(1) 動植物を愛護することによって、豊かな人間性を養
うことをねらっている。

(2) 自然の事象に関心を持ち、やがて科学性の芽生えと
なり、自分で見たり、考えたり扱ったりする意欲を
育てる。

科学的態度というのは、事実を尊重し実際の物事
について観察しようとする態度で、教師は科学的な
態度や、能力に深い関係がある。

(3) 生活の中の科学性について、幼児らしく適応することを考える。

(4) 科学的な思考、生活経験を通して育てていくねら
いから、数量・図形を自然の領域に入れた。など
……。

よく読み考えてみますと、山川、気象、夜の自然現象など、幼稚園では出来ないこともあり、幼稚園と家庭の環境の違いもあり、日常生活の中で、幼児の行動の瞬間を捉えてしか指導出来ない事もたくさんあります。

幼稚園と家庭とが、同一理解で幼児の経験の瞬間の指導を大切に積み重ね、T・V、電熱器具、用具などの安全な正しい使い方の指導・躾の繰り返しが大切だと、常々感じていました。

自然の指導には、教師の科学的態度や、能力に深い関係があると説明されておりますが、幼児と生活を共にする家族には、もっとたくさんふれあいの時間があります。

す。

自然とのふれあいの生活は人間形成の一番基本的な健康なからだ、心の内面性を豊かにし、感動する心、いくしむ心、情操を育てるものであります。

宇宙の自然の創造への思考、観察などで科学性の芽生えを育て、知能の成長、発達を助ける経験にもなりません。

特に動物、草花、虫などは幼児の大切なお友達であり、「生かすこと」「生きる習性」「いのち」を学ぶ大切な教材です。

飼育した小さいものの死を悲しみ、お墓をつくって野の花を供えているのを見て、何時も幼児の美しく育っている心を感じていました。

◆父母の返信から

集った夏やすみの記録三五七枚の中から、数人の幼児の姿をうかがってみました。

年長児 父

今年の夏はこどもと一緒に自然にふれあい、いろいろと勉強させられました。

生きもの（昆虫）とか宇宙のしくみなどの質問に、親の方がとまどい、答えるのにむつかしくて、子供と図鑑を取り出して、勉強をしました。

海に行くかどうかして波はおこるの？

日食時には、写真のフィルムをとおして見ると、太陽が見えるよ。

どうして太陽が、半分になるの？

空はどこまであるの？

地震は どうしておこるの？

今まで図鑑があっても見もしなかったのが、いろいろわからないことがあると、一人で見るようになりました。

自然とふれあい、地球の生きもの、植物など、自然の

バランスにとっても大切なことを、こどもなりに知ったようです。

年長児 父

自然とのふれあいの旅に二泊三日の日程で宮城蔵王の保養所に出かけました。

エコーラインより、砂利道を十五メートル位林の中に入り、周囲には何もない山小屋です。

電気は通じていますが、電話もない所です。根が臆病なこどもなので、自然の中でいくらかでも昆虫や、動物に馴じませようと思ひ連れて行きました。

とんぼを取ったり、ちょうちょうを追いかけたりして、いろいろな種類のちょうちょうがいたので驚いていました。

今後の生活に、多少でも役立てばと思っております。

年長児 母

今年のはみがなくて、どこにも出かけられませんでし

たが、ある朝、出窓から庭木の間に、大きなくもの巣が一晩の内に出来ていました。

子 「すごい大きなくもの巣だよ」

家族全員が出てみました。本当にみごとな、くもの巣でした。

父 「前に田んぼで作っているのを見たけど、どうして

こんなにすばらしい幾何学模様になるのかなあ」

母 「やはり向い側に一度飛ぶのかなあ」

祖父 「いや違うよ。夜の間目標の風上において、糸を出すのさ。そして、風にとぼしてもらって、一本の

糸を張り、明け方にその一本の糸を伝わって、次々に巣を作っていくのだよ。」

皆で 「へえー そうなの、知らなかったね」

子 「くもの糸って、すごくねばるんだよ。この間、黒アゲハちょうがかかって死んでいたよ。」

父 「少し残酷だけど、くももそうしなければ生きていけないんだよ。」

子 「ふうん？」

幼児の夏の生活のたぐさんの貴重な記録が皆書けないのが残念ですが、こどもの遊びが異年令集団を通じて発展していくのと同様に、親、兄弟など、家族との関り方や、対話によって、自然への関心、興味、理解が深まり、愛情が育って行く事例がたくさん見られました。

親の感覚は、子供にストレートに伝わっていくもので、論理的なものでなくとも、幼児の鋭い感性によって、自然を正しく捉えていました。

幼児のつぶやきや、話し合いの記録を通して、一人一人の幼児の未分化な内面・興味ある遊びをうかがい知ることが出来て今後の幼児一人一人への、ふれあい方、指導の参考になりました。

家族ぐるみで、一年中の自然に気をとめて自然のふれあいで、心豊かに、たのしい毎日を過したいものです。

(宮城県聖光幼稚園)

うさぎぐみ音楽会を終えて

青 木 裕 子

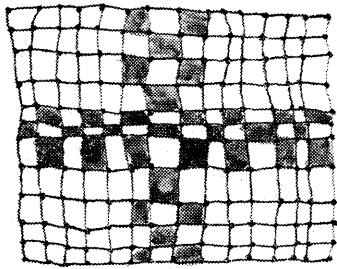
だれしも自分の精神史をふり返ってみると、音楽なり
絵画なりがその折に占めてきた意味があり、思い出があ
って、時にはある作品が果たした役割の大きさに驚くこ
とがある。うさぎぐみの子ども達に、そんな精神史をつ
くりあげる機会を与えてあげたいという漠然とした願
いをもっていた。

ところが、その願いが思いもかけず実現された。

——目をまーるくしてじっと見入っている子、一人立
ちあがり胸の前で手を握りしめ、うっとりしている子、
隣の友達と顔を見合わせニコリしている子……。

今、楽器紹介が終り、『動物の謝肉祭』が演奏されて
いる。まだ、音楽会が始まって三〇分しか経過していな
い。しかし「音楽会は成功した！」と、心の中でつぶや
いてしまった。この判断は早すぎるかもしれないと思
いつつ、「成功」という言葉しか思い浮かばない。むしろそ
の判断に自信をもっていた程だった。そしてその通り、
うさぎぐみ音楽会は大成功だった。

これまでクラシック音楽の名曲鑑賞は、幼児の保育場



面では必要性を感じていなかった。なぜなら、音楽だけが宙に浮いてしまい、音楽作品自体も他と切り離されてしまうからである。幼児の保育場面では、子どもの生活と音楽作品がつながっていなければならないと考えている。

うさぎぐみ音楽会は、その点を頭におきつつ、子ども達にとって音楽をより親しみのもてるものにしようとの願いをもって、一年前から準備が始められた。この音楽会のきっかけは、うさぎぐみ在園児の父親が東京都交響楽団のクラリネット奏者である事。その父親を含め、都響のメンバーが二人編成のミニ・オーケストラ（東京都交響楽団トップメンバーアンサンブル）を作り、ここ数年来、各地の幼稚園で演奏会を行なっていることを聞き、父母の側から「ぜひ、うさぎぐみでも演奏会を」との声が高まったのである。私達職員は、その声にあおられ気味になった程であった。当初は、幼児が一時間も集中して聴いていられるかどうか、演奏会の雰囲気を出すにはどうしたら良いのか、グランドピアノが2台もいる

のか、ピアノ運搬費がそんなに高いのか、費用が足りないかもしれない……。初めての試みでもあり、不安な材料ばかり目につき、手探りの状態からのスタートであった。しかし、うさぎぐみのお母さん達には子ども達にナマの本物の音楽を聴かせたい、そして自分も一緒に味わいたいとの熱意があった。これまで年三回だった廃品回収を毎月一回ずつ行ない、収益をあげ、又各家庭で音楽会のための積み立ても始めた。うさぎぐみは園児の家庭そしてその置かれている地域は、階層としては決して豊かとは言えない。そんな苦しい家計の中から積み立て金を捻出するのは大変だったようだ。「一人五千円も積み立てするなんて高すぎる」「クラシックなんて、固苦しくてイヤだわ。」等、反対意見も出ていた。新しい事を始める場合、最初から足並みがそろわないのは当然ありうることだ。

しかし、準備打合せの中で他の幼稚園での演奏会の状況を聞き、見学にも行き、又都響トップメンバーアンサンブル代表の相葉武久氏の熱意にあふれた説明を受け

た。それにより、うさぎぐみでも演奏会を開くことが可能だと考えられるようになってきた。

それは、第一に子どものための演奏会は一般的に小学生以上が対象であり、幼児がナマの演奏を聴く機会は皆無である。だがこの演奏会は幼児を対象とし、しかも大会場へわざわざ出かけていくのではなく、子ども達が毎日遊び生活している場で、その音色と迫力をからだ全体で感じとれること。又、手を延ばせば届くような近い所で演奏することにより、大会場では感じとれない空気のやりとりがあること。

第二に、通常の演奏会では、聴衆はどんな小さな雑音にも注意しなければならないが、幼児のための演奏会では、少々体を動かそうが、「わあースゴイ！」など演奏にかかわる声を出しても構わない、と事前に伝えられた。

それは演奏者が幼児の特性をつかみ、暖い目で子ども達を見つめているからであろう。そういう演奏者の親しみやすさと、在園児の父親がメンバーに存在していることは、音楽や楽器に対し、さらに親しみが湧くこと。

第三に、日常の保育の中で歌っている歌をオーケストラと一緒に歌うことにより、子ども達ひとりひとりひとりが本物の音楽と対等に参加できること。これらの点は、都響のメンバー代表と私達職員との打合せの中で確信を深めることができた。

それらを踏まえて、父母に対しては毎月の父母の会の中で、幼児のための演奏会の意味を説明した。前述の廃品回収、そしてバザーにおける演奏会資金作りのための手芸品製作と手作りケーキの販売。このような準備を進めるうちに、演奏会を盛りあげようと、父母側の気持ちもまとまってきた。

しかし資金作りには苦労が多かった。うさぎぐみは少人数制を目的としている幼児グループ（無許可）なので、その年度の在籍は総勢四四名であった。当然各家庭の積み立て金だけでは、演奏会の諸費用すべてを賄えなかった。そこで父母側からも名案が続出。限られた予算なので、楽器移動の費用が捻出できない。そこで、演奏会場（成人クラブ室）へのピアノの搬入・搬出を力自慢の

父親達が、夜、それぞれの仕事を終えてから集り、六・七人であっといふ間に一階から二階の会場へセットした。ランドピアノは予算の都合上、どうしても借りることができず、二台ともアップライトピアノではあったが、これは演奏者が心良く了承して下さった。照明用のスポットライトは、町のアマチュア劇団から借り、反響板が無いので、代用の木製つい立ては、隣の保育園から、又暗幕は市社会福祉協議会から借用するというように、地域の資源を最大限活用した。会場作りは、演奏会用に座席のヒナ壇作り、照明・録音設備のセット、装飾等、すべて職員の手作りで仕上げた。

演奏会は音楽を演奏する人達だけでは出来あがらない。聴衆がそこにいて初めて成立するものであり、そして部外者は一人もいないと言われている。まさにうさぎぐみ音楽会は、この通りであった。聴衆であるうさぎぐみの子ども達、父母、職員と演奏者がピタリ一致し、聴衆同士も心をつなぎあえることができた。これこそ音楽鑑賞の本来の意味でもあろう。

準備段階で最も不安な材料であった点、即ち子ども達
が飽きずに聴いていられるかどうか、最後まで心配であ
ったが、ナマの本物の音楽の前でそれはまったく杞憂に
終わった。又、子ども達を緊張させる必要もまったくな
く、保育者が子ども達に対して、音楽会への期待感をふ
くらませるだけで充分だった。『楽器紹介』『動物の謝肉
祭』『おもちゃのシンフォニー』そして最後に童謡四曲
をオーケストラの伴奏で歌うというプログラムが進むに
従って、子ども達が音の世界の楽しさに吸い込まれてい
くのが手に取るようにつかめた事が大きな喜びであっ
た。

父母や職員にとっても、ナマの本物の音楽に接するこ
とにより、心にゆとりをもつ素晴らしいひと時となった。
又、音楽に対して新たな目を向けるきっかけともなった
のである。

こうして、ひとりひとりの心の中に音色と感動を、そ
してさまざまな余韻を残し、第一回のうさぎぐみ音楽会
は終了した。昭和六〇年三月の出来事であった。来年も

ぜひ音楽会をみんなの力で作りあげたいというおまけが
つく程の大きな手ごたえがあった。

さて翌年度に入り、さっそく四月の父母の会で、第二
回目の音楽会を催すかどうか相談された。第一回目の印
象が色濃く残っていた継続児の母親達から、「ぜひ今年
も」という声や、「うわさを聞いて卒園児も参加したい
と言っている。」という盛り上がりが見られた。昨年は費
用の捻出に苦労したので、卒園児に参加してもらうこと
により、少しは資金的に楽になるのではないかという提
案が出された。そこで第二回の音楽会は、うさぎぐみ
園児と父母、そして卒園児とその父母が参加し、聴衆は
親子で一六〇名余りとなった。昨年と同じ会場なので、
肩と肩がふれあう程ぎっしり詰めこまれたという悪条件
ではあったが、三才児から中学生まで、それぞれの年令
に応じた反応が見られた。

もちろんプログラムは、昨年同様幼児を対象とした。
まず『楽器紹介』クラシック曲はナレーション入りで
『ピーターとおおかみ』そして次に運動会のリズムで使

った曲がオーケストラから流れ出すと、子ども達は自然に体を動かし始めた。最後に日常の保育の中で歌っている童謡三曲をオーケストラの伴奏で歌い、終了した。(昭和六一年三月)

子ども達が心から満足して音楽を聴くのか、何の感動もなく聴いているのか、どちらの聴き方であるかによって音楽の意味合はずいぶん違ってくる。

幼児期は、何の頼りもなく聴覚だけで音楽を把えるには幼なすぎる。音楽に共感し理解するには、何かのきっかけが必要であろう。絵画や芝居の鑑賞と同様に、音楽においても観たり聴いたりする経験と、それに関してどのような事柄を知っているかという幼児なりの知識との相互関係により、その子なりの音楽を聴こうとするようになる。具体的な生活経験を通して、音楽への理解が始まるうとした幼児期に、うさぎぐみ音楽会で子ども達は、それが楽しい想い出と関連することにより、自然に音楽のかおりを楽しむようになると思われる。

ゆっくりとした自然の成長テンポがくずされようとし

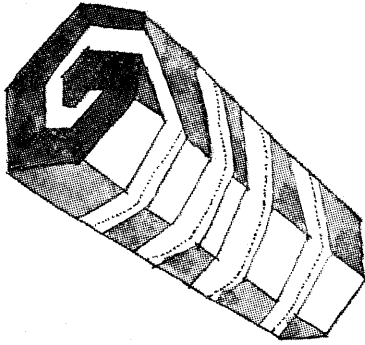
ている今、たった一時間の音楽会ではあったが、忙しい世の中を吹きぬける一すじのすがすがしい風を感じた。うさぎぐみの子ども達が成長し、いつの日か又、ナマの本物の音楽を聴く機会があれば、幼い頃の経験が何かの役に立って、その時にたじろぐことなく演奏を聴くことができようであろう。そして、彼らが好みに合った音楽を自ら見つけ出し、生活の中で「音楽すること」のできる能力をもつようになると信じている。

(横須賀基督教社会館

幼児グループ・うさぎぐみ担当)

若いお母さんたちへ

引越という名のハードル



はるにれの会

入江礼子

この春、我が家は新学期を前にして、千葉市原の地から、東京は渋谷区代々木に引越をしました。市原には九十年おりました。一つ土地で十年間住めば、自ずと人間関係も親密になり、ましてや三人の子どもを育てながらの十年間でしたから、この社宅団地では、良きにつけ、悪きにつけ、最後の方は、主ぬしに近い存在になっていました。前回「ゆだねつつ育てること」というのを書かせて頂いたのも、そんな背景があつてのことでした。子育ては、つくづく自分一人で抱えきれぬものではない、むしろ隣近所に代表される回りの人々に助けられてしていくものだと確信に近いものを持つに到った矢先のこの一家大移動だったのです。

代々木の地は夫の実家。七十を越えた姑と同居ということになりました。

こうした全く私的都合での引越ですから、夫の勤務先は元のまま。つまり千葉のままです。工場ゆえ始まるのが早く、おまけに駅から工場まで徒歩三十分、どう早くても代々木からでは二時間三十分かかってしまいます。そんなわけで夫は単身赴任寮に残しての引越と相成りました。単身赴任とは言っても金曜の夜から月曜の朝まで一緒に過ごせるわけです、週日も一度は出張のため東京ですのでから、遠隔地での単身赴任を余儀なくされている方から比べれば、随分と柔なものといえます。

というわけで、私としては回りの様々な心配をよそに、結構気楽に引越してきたつもりでありました。唯一気懸りなことといえば、子ども達の友達の問題といえましょうか。三人の子達は、それぞれ市原では気の合った友達もいて、かなり自由に思いきり遊んで暮らしていました。A(小三)は、クラスにも近所にも本人自身が親友だと呼んでいる友達がいました。引越間際から引越後一ヶ月くらいは、彼女達のことをしょっちゅう思い出し、今何をしているかしらと言いつづけておりました。

そうしながらも、こちらの地でも友達を作りたいという気持ちには人一倍あり、その姿勢も非常に積極的でした。

近所の子とも達と登校するのですが、一日目にはRちゃんが話かけてくれたとか、又、学校でもFさんが話かけてくれて嬉しかったとか、毎日そんな報告をしていました。聞く度に、その拡がりが手に取るように分かり着実に地を固めていっているので、かなり安心しました。このAは、幼稚園入園当初、先生の手を一週間も握っていたという経緯があり、私にはその記憶が鮮明に残っているため、ついついそういう目でAを見がちになります。けれども現実には、その幼稚園の先生が、手を握り続けてしっかり受けとめて下さったお陰で、彼女の中には、人間、信頼するに足るといふ信念のようなものが芽生え、多分、早くお友達が出来ればよいなという不安と同時に、絶対出来るに違いないという確信も心のどこかに育っていったと思うのです。牛の歩みのようにゆっくりではありますが、友達との小さな関係も、嬉しさとしてしっかり受け止め、それが自信となって次の日に繋って

いつているように思えました。そういう経過をたどり夏休みを目前にした時点では、Oさんというピツタリ気の合ったお友達のほか、数人の仲良しが出来、男の子とは、ぶちあいのケンカをし、仄かに想いをよせるS君の運動会の写真が、今迄机を飾っていた社宅の時の友達の写真と入れかわって飾られるようになったのです。彼女なりに努力してこの一学期を越えていった感じですが。私としては、彼女の姿勢が前向きだったので随分救われましたし、見守るだけであとは全部A自身が切り開いてゆきました。

そしてT(小一)。この春、地元の小学校に入学しました。当然お友達といえる子は一人もいなかったわけですが、入学後間もなく学校の隣りにある通称キシヤポッポ公園という所でT君やK君と約束してきたといつては出掛けていきました。春休みの間は、遊びながら、「あーあ、ここにH君やU君がいればいいのに」などと言っていたのですから、学校に入っすぐこうして活動を開始したので、私たちはホッと胸を撫でおろしました。T

の特徴は、誰と遊んだのと聞いても、うまくそのお友達の名前を答えられないことにあります。「名より実」というのを地でいっている感があります。遊び場もキシヤポッポ公園に留まらず、そのままお友達の家へ流れていたりします。「お友達のうちへ行ったよ。」と言うので、名前をきいても「何だったっけ。忘れちゃった。」と言う始末。そのお宅へのお礼の電話が一月後なんていうのも珍しくありませんでした。東京へ来たなら、今迄のように靴がドロドロになることも、服がグシヤグシヤになることもなくなるんじゃないかと心配していたのですが、さすが、Tの場合、そんな親の懸念はあつという間にふっ飛び、靴はまっ黒(ドロではなく黒いのは空気のごれのせいでしょうか)、Tシヤツしかり、おまけに体に傷まで作って遊んでいます。こんな都会に来て、千葉で培った遊び魂は、ちゃんと蘇みがえるんだなあと感じてしまいました。こちらに来て二ヶ月後の家庭訪問の折、先生に「生まれた時からここに住んでいるってこういう大きな顔をして、学校では過ごしていま

すよ。」と言われ、嬉しいやら、恥しいやら……。そう
です。TはAと比べるとむしろ家以外の場で発散してく
ることも多くそちらで感情をむき出しにすることがある
のです。私や姉や妹に囲まれ、Tは、ちょっぴり窮屈な
生活をいられているのかもしれないと反省させられて
しまいました。少し時が経つと、何が何でも外で遊ぶと
いうことはなくなり、自分で選択して家に居ることも出
来るようになりました。色々ありながら、引越が格別障
害になることもなく新一年生の生活を満喫しているよう
に見受けられます。給食はおいしいし（自校給食のせい
でしょうか）、友達はいるし、休み時間は、思い切り雲
梯をしているし、ケンカももちろんありますが、今のと
ころTは、学校たのしいという結論に達しているよう
です。

そんなわけで上の二人は、学校という、子どもの集団
に助けられて、あっという間に引越というハードルを越
えていってしまいました。

問題は、気楽に引越してきたつもりだった私と、三番

目のKだったのです。Kは六月に四才になりました。三
才の末に引越して来たことになりました。私とKが何故問
題になったか、次に考えてみることにしましょう。

Kは二才過ぎから、生まれてすぐからの親子で友人で
あるN子ちゃんの家、送って行きさえすれば、私がい
なくともよく遊べるようになりました。三才時代は、殆
んど毎日といっても過言ではないくらいお互いの家へ行
ったり来たりで、お使いの時など双子と間違えられるこ
とがある程よく一緒に過ごしていました。派手な喧嘩も
しょっちゅうですし、親のいる方が甘えてグズグズ言
うこともよくありました。けれども、KもN子ちゃんも、
お互いが一番ピタリした相手であることに変わりはない
く、本当に良く遊び込んで行きました。そのうちに、ご
く近所のS子ちゃん（二年年長）に遊んでもらったり一
才半年下のM子ちゃんのお宅にお邪魔したりとすこしずつ
その輪を拡げ、ともかくKは慣れ親しんだ世界で、内
も外もなく自由にお友達と遊び暮らしていました。我が
家でじっくり一人で遊んでいるなどということは皆無に

近く、Kは精力的に外向きに動き回っていました。Kはこのように良く遊んでくれましたから、私も家にいる限りは、不思議と自分自身の時間を持つことが出来、二人でベッタリ過ごしたという記憶は、私にはあまりありませんでした。

そういう生活全てが、この引越で根こそぎ奪いとられてしまったのです。上の二人が、すぐにといいてよいほど早く周囲に馴染んで自分らしく振舞えれば振舞えるほど、私とKの落ちこぼれぶりは見事という他ありませんでした。

朝八時、上の二人が登校すると、Kと二人きりの生活がはじまります。(姑と同居なのですが、玄関だけが一緒で、あとは独立した暮らしをしています) 最初の項、まだ引越したということが実感として捉えられていなかったKは、今迄通り、朝からM子ちゃんやN子ちゃんの家に行きたいと決って言い出します。それが叶わないとなると何となくグズグズし、一人遊びに慣れないKは、自分を持って余している感じでした。そういうKをみて、

私自身も何となく落ち着かず、お友達がいらないからこうなるのだとばかり、公園に連れて行ったり、近くの渋谷区のスポーツセンターの幼児体育室に遊びに行ったり、代々木公園の幼児車乗り場に行ったりと二人で放浪の旅を続けました。けれど予想以上にKと同年令の子の姿を見つけることはむずかしく、場所を変えてもKと私という二人だけの構図は、ちっとも変わりませんでした。何故子ども達がいらないのか？ いくら都会といっても、もう少し子どもはいるはずではないのだろうか？

結局一ヶ月余りも経って思ったことは、まず私たちの行動開始時刻が、Kと同年令を第一子に持っている家庭に比べて、ずっと早いのではないかということでした。私たちは九時にはあちこち歩いています。そしてお昼前に引き揚げるのですが、どうやらその引き揚げるころになってボチボチ子ども達が出て来るのです。それでも今年四才になる子はほとんどいませんでした。もう少し年令が低いのです。もう少し時間をずらそうかとも考えましたが、上のTが新一年生でもあり、四月中は帰宅時間が

早いため、それもままなりませんでした。今迄の社宅近くの公園と違って、ここでは、誰かが遊んでいるから、その姿を見て、子どもが出て来るなどということは考えられないことなのです。親が連れてこなければ出掛かれませんから、たとえ早くから外に遊びに出たいという欲求が子どもの側にあっても、それは叶わないことになります。

いくら早く出ても子ども達に会えないので、私たちは無理してまでも外出することをやめ、朝ゆっくりと家で過ごしてみました。最初のうち自分を持って余し気味だったKも、私が片付けやら掃除やらをしている傍らで、絵などを描くようになりました。気がついたら「頭足人」という感じでした。つまりメチャクチャ描きやなぐり描きをする時期、Kはお友達と遊ぶことに忙しくゆっくりりそういうものを描いたことはなかったのです。今、堰をきったように家族の一人一人を何枚も何枚も描きました。こういうことをKがしはじめたあたりから、私も少しだけ、お友達が今はいなくても、Kの中では伸びて

いくものがあるかもしれないと思いはじめました。そう思つて覚悟を決めると不思議なもので、絵を描くだけでなく、リカちゃんやぬいぐるみを出して一人でおままごとをしたりすることが目立ちはじめてきたのです。Kがお友達と一緒に屈託なく声をあげて笑う姿が見られないのは、とても寂しい気がしましたが、ひとまずは、成り行きにまかせてみようと思ひました。

Kは三番目の子どもです。三番目ともなると、親の方も良きにつけ悪しきにつけ慣れた育児となり、色々なこだわりがなくなるかわり、かなり無意識に日々を過ごしていきがちです。Kは、ケンカはあつてもお友達と良く遊んでいましたから、何か良くは分からないけれども順調にいっているようだからの大雑把な据え方しか出来ないでいました。そして、それでよいと思つている部分も多々ありました。しかし、この引越によつて、彼女が友達から引き離されてはじめて、私は、私がKを育てているのだという意識を持たされたといつても過言ではありません。もちろんオムツがとれるくらいまでは、当然

そういう意識を濃厚に持つてはいましたが、KがKなり
の友達との世界を持つようになってからというものの、心
理的にはかなり手放した状態でいました。一番上の子を
育てるのと違い、三番目ともなると、家の中でも兄弟同
志で育ち合っていく部分も多く、母親である私は、外側
から見守るのが大きな役目で、直接手を下して何かする
ことは、非常に少なくなっていたのです。そういう折も
折、こうして二人でむかいあう状態を余儀なくされた私
は、K共々非常に戸惑いを感じました。むしろ私の方が
早くKにお友達を欲しいと思っていたのだと言っても過
言ではありません。お友達がみつければとりあえず、こ
の二人ベッタリの状態からは解放される。解放されれば
何とかなるといったような短絡的思考が働いていたよう
に思います。

あちこち探してもお友達が見つからず、いよいよ最後
の手段ということで近所の幼稚園をKと一緒に見学して
きました。そこで見たものは……。確かに子どもたちは賑
やかに元気でした。Kと同年の子も何人もいました。

けれどもたまたま、年少組（四才児）の若い先生が、
「今度先生の言うことをきけなかったらお外へ出します
よ！」とこわい顔で叱っているのを見てしまったので
す。私は、ここではじめて我に返りました。今の先生の
対応は、子どもに対する母親の強圧的な態度と何らかわ
るものではないかと思つたのです。叱っていた細かい内容
は省略しますが、ともかく私には大したことないと思え
るようなことで叱っていました。ここにきてはじめて、
私はKとベッタリいることを重荷と自分が感じていたこ
とを悟り、それから逃れんがために幼稚園に預けようと
していることに気付きました。確かにKもお友達を欲し
ていました。けれどもKはKなりに、お友達がいないと
いうことを事実として受けとめ、自分なりに、一人の時
を自らの充実の時として歩みはじめていたのです。私は
そこにはあまり気付かず、お友達さえいればKも私も何
とかなるという幻想に振り回されていたといつてよいで
しょう。市原の地で回りの方々に助けられて、自分の時
間というものを手に入れてしまった私は、無意識のうち

にそれにしがみついてしまっていたのです。Kのためと思つてあれこれ動いていたのが実は自分のためでもあつたということは、本当にショックでありました。

幼稚園には、今は入れまいと思ひ、ともかく今は、Kと二人で居よう、そう思つて改めてKのことをみてみると、姉兄達より、台所まわりのことは良く知つていますし、傍らでお米をといでくれたり、お皿洗いをやつてくれたりします。「お母ちゃまはいいね。毎日こんな楽しいことしてゐるんだもんね。」と言ひながら楽しそうに食器洗ひをしているK。本をひっぱり出してきて暗誦しているK。姉が学校にいつている間、絶対つかわせてはもらえないものをそつと使つて密やかに楽しんでゐるK。よく見れば、もう退屈してゐるKではなくなつてゐるのです。その萌芽に気付かず、ひたすら友達をみつめることで事を解決しようとしていた自分が恥しくなりました。

月に一度、市原でしている「千葉はるにれの会」の親子の集まりでは、水を得た魚のように、従来以上に元氣

に友達と遊びまわつてゐるKを見て、今現在、お友達が目の前にいないということは事実ではあつても、Kの一人である時間が豊かになれば、Kの成長にとつてプラスにこそなれ、マイナスにはならないのだと改めて思つたのでした。

Kにとつて引越というハードルは高く越え難く思われましたが、越えるための一歩はしっかり踏み出したようです。そして私も遅ればせながら、ゆっくりとこのハードルを越えていきたいと思つたのです。と同時に、今度、二人でいることから逃れるための友達探しではなく、この場、この地域に根づく友達探しを細々とでも続けてゆけたらと思つてゐます。

「心に刻むというのは、ある出来事が自らの内面の一部となるよう、これを誠実にかつ純粹に思い浮かべることであります。……過去に目を閉ざすものは、結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです」

〔岩波ブックレット『荒れ野の四〇年』より抜粋〕これは、一九八五年のドイツの敗戦記念日に、西ドイツのヴァイツゼッカー大統領が行った演説の一部です。

四〇周年ということで、再び戦後論議が盛んになった中で、大統領演説は、国内、国外で大変高い評価を受けたと聞きます。この演説を貫いているのは、高い倫理性です。過去を見つめることこそ和解の糸口である、と淡々と説くその語り口は、読む者を感動させます。

同じ西ドイツにホイス賞という人権問題等に尽くした人に与えられる賞があります。今年のホイス賞は、ポーランド人

のシマンスキー氏が受賞しました。その受賞理由にはこの大統領演説のエッセンスが盛り込まれています。その表題も『心に刻む勇氣—和解への力—』でした。

シマンスキー氏は、一九一七年ポーランド生まれ。一九四一年に逮捕され、アウシュビッツ収容所に収容されました。各地の収容所を転々とした後、四五年に脱走に成功。終戦を迎えます。その後はアウシュビッツ収容所跡の博物館にとどまり、民族間の和解のために努力してきました。彼の半生はまさに、「心に刻む勇氣」を体現したものとさえいえます。

そのシマンスキー氏が一月一日に日本にやってきました。二五日には東京・渋谷の山手教会で講演会が行われます。「心に刻む勇氣」という言葉は風化しつつある日本で、シマンスキー氏の講演はどのような反響をおこすでしょうか。



幼児の教育 第八十五巻 第十号

十月号 ◎

定価四〇〇円

昭和六十一年九月二十五日 印刷
昭和六十一年十月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京九一—一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

保育の再点検 〈全5巻〉

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著



- ①望ましい生活習慣
- ②望ましい集団づくり
- ③望ましい当番活動
- ④望ましい行事と生活
- ⑤望ましい言葉の指導

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きっと役立つ〈全5巻〉です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

A5判・セットケース入り・各208頁・セット定価6,750円

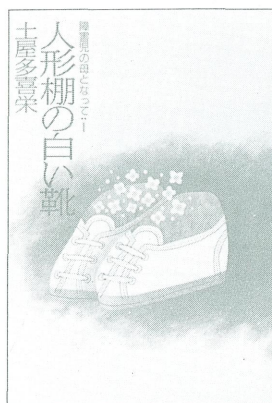
くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

子育てに関わるすべての人々に、 深い感動を呼ぶ人間ドキュメンタリー。

重い脳性まひの娘がかえってその母の人生の幅を大きく広げた。母は困難を超えて独力で保育所を作り上げ、子育て・人間・人生について誰よりも深い真理に触れた。この2巻は『障害児の娘と保育の仕事と』の著者が、自らの生い立ちから娘の出産・人生の転換を経て、心身障害療護施設の設立に成功するまでを綴る半生の記録であり、子育てに関わるすべての人々に深い示唆と感動をもたらす人間の記録である。



人形棚の白い靴

— 障害児の母となって① —

- 著者自身の生い立ちから末娘・友ちゃんの誕生。絶望と不安、障害のある子を育てながらも仕事を続けたいと願う心の揺れ動き。そして、決断。独力で保育所を作り上げる。母として、保母として障害児保育の勉強に意欲をもやす。



ありがとう ごめんね

— 障害児の母となって② —

- 友ちゃんの入学。さまざまな障害を持つ子らの発達にに応じてなされる教育の現場の姿。そして、友ちゃんの卒業後の生きる場を保障したいという願い。それは、親亡きあとも安心して生活できる場を作る活動へと発展。奔走は実を結び、多くの後援者を得て心身障害療護施設『麦の家』設立に成功する。

高城山保育園園長 土屋多喜栄・著 四六判・各巻256頁・定価各1,200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館